

# 白珠

十二月號



第六卷 第十二号

酒井青峯著

白珠叢書第二篇

## 歌集 白木槿

序文 安田青風  
裝璜 榎方志功

B6版 一六〇頁 美本  
價一九〇円(送料共)  
白珠社發行

つつましく白藤の花咲きて居り警察廳舎の  
裏庭にして  
屋根瓦肩に人夫の登りゆく足場のゆれに藤  
の花白し

といふやうな純な觀照が成立する精神の場といふものは矢張り尊とい  
思ふ。……この巻頭の淡々たる詠風は、多少の曲節を含めて殆ど全巻を  
貫いてゐる。云々―序文の一節―

・著者の原書御希望の方は、御申込の節、お書き添へ下さい。

大阪市住吉局區内帝塚山西四丁目十三

黎明社

酒井青峯  
振替大阪一八三四二番

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十六年五月二十一日國政特別取扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十六年十一月二十日印刷昭和二十六年十二月一日發行

白珠 SHIRATANUMA 第六卷 第十二號

定價 五十円

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十六年五月二十一日國政特別取扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十六年十一月二十日印刷昭和二十六年十二月一日發行

白珠 SHIRATANUMA 第六卷 第十二號 通巻 五十九號

### 白珠社發行又は取次書

安田青風歌集	街空	(品切)
同	歲月	(品切)
安田章生歌集	茜雲	(品切)
同	心象	價八〇円(送料共)
同	現代短歌ノート	價五〇円(〃)
藤本伊都子隨筆集	紅しほり	價二〇円(〃)
小野三沙子歌集	壁	價八〇円(〃)
白珠知的抒情歌集	焦點	(品切)
白珠第一歌集	集	價一一〇円(送料共)
白珠第二歌集	集	(品切)
酒井青峯歌集	白木槿	價一九〇円(送料共)

#### ・白珠第六卷合本

クロス金文字入製本、送料共三百五十円。御希望の方は十二  
月二十日までに御申込み下さい。

#### ・白珠バックナンバー

創刊號を除き若干あります。一冊送料共十五円。御希望の方は  
號數明記の上御申込み下さい。

大阪府豊中局區内新免七五七

白珠社

振替大阪一〇三三九〇番



赤い靴はいた初チャンが母さんの春に隠れてさよならをいふ  
眠たいとむりに母さんに負おして皆くいつたと笑ふ初チャン  
この花は奇麗といへばきれくないと反對をいふ春の初チャン  
大きくて重いといへば春の上に軽いと弾む初チャン  
四辻に休振りつつ母さんにむりをいつてる初チャンのボーズ

ボポ 谷 克美

京都よりはるばる送り来りたるボボーは未だ實を結ばざり  
稗を切る母の背中にかおさりて垂りし稻穂の重だげに見ゆ  
夕風にしばしゆれ合ふ芭蕉葉に既に秋づく雲移りつつ  
かたかたと出で行く吾子の三輪車門邊の萩の花こぼしつ  
自らを慰めむ歌のいくつかを作りたりしがまた裂きて捨つ

かはたれ 杉野としゑ

かはたれの水面を白き舟浮きてしづかなる秋を歌はんとする  
しづもれる歩道に楚々と注がる遠き秋陽の聲なき言葉  
かはたれの空しづもれば遠々の雲に歌ありて秋を歌へる  
都心街の生理あらはに高樓のネオンはとりどりの夜を息づく

故郷 西尾 朱由

故郷の城の蓮池に案山子たち稻稔りたり風さやぎつつ  
泥川の橋に立ちたり故郷のどろの匂ひのなつかしければ  
花終へしダリヤの幹を打またぎ籬の穴をつくろはんとす

朝の土間 田中 雨花

あかときにもぐらは穴を穿つとふ水足田の畔を見廻るわれは  
ひやびやと明け方近き頃にして一枚の田は水張りわたる

リーダースダイジェスト社にて 二首

杵無しの廣き窓より皇居見しアメリカの錯覚から已にかへる  
極端にシムプルアンドクリアなるアメリカの事務所に芯疲れせり  
色づける街樹の雨にぬれたるが眼にのこり過ぐお堀端の路

三瓶高原 永瀬 翠明

雨となる豫報はづれて薄陽さす石見大田にバスを待ち居り  
行くバスの目交ひにせまる大三瓶の緑のスロープは空を限れり  
裾野原おのづからなる起伏し一本の道ますぐに横切る  
石あまた屋根の上のせ住みひそむ山の温泉の一筋の町  
雨ふれば遊行の心もあはただし朝立ちのバスに山を降り  
四十年越え来しかたをふと思ふすでに秋なる庭にむかひて

失戀 田中 克己

かくばかりかなしきものと知りつつも汝は死なせて泣くべかりけれ  
いやはての息引きとりしながむくろ抱き上げてこそ泣くべかりけれ  
二人して登りし山のものいはぬ磐にぞ倚りて泣くべかりけれ  
あを撫でしなが腕とりて冷たしと聲あげてこそ泣くべかりけれ

修學院詠草 安田 佐和乃

いささかのしめりの砂をふみてゆく遠世の人を眼に描きつつ  
裁られし松の並木の道清しおのづから人ら聲低くして  
掃かれたる砂うつくしき段をふむ素足の觸りは心呆けしむ  
案内びと型のごとくに説くなれどほのぼのたのし調度の水屋  
もろもろの歴史は生きて迫り来る刈りこまれたる巾廣き垣根

光れる白雲 得光 鶴代

水足れる田面にうすく朝焼の雲うつりぬて豆蒔かむとす  
梅雨じめる朝の土間にかび臭き飯を喰らへど妻をとがめず

九月の空 野口トミ子

ものは皆一つの空の下に眠りわがたましひは忘れ果てぬ  
獨りなる夜を啼きつぐ犬の子よわれも心の孤獨の子なり  
いね難き或る夜たましひ漂ひて遂に運命に従ふとせず  
海のなか清らかに魚の住みてゐる幻影われにかかはりなきに  
やがてかなしき凝視の的となりてゐる灯遠く闇にうるほふ  
べつとりとかなしみ今日も乾かざりき九月の空が重く曇りぬ

鳴りいづる鐘 中村 秀哉

秋風に白き雉が光るとき貧しいわたしに風化がはじまる  
ある時ははげしく自己を嫌悪して嘔吐の如き心情にゐる  
終業のベルなれば手早く片づけてこの少年は夜學にかよふ  
ロソクを灯して學ぶ少年よ苦しみは君らの世代にも濃く  
すでに輝く瞳は持たぬ少年か冷たき窓に神を拒否する  
病める街昏れゆくときに吾れは待つ丘の上より鳴りいづる鐘

頼む星 西島 貞子

底ごもり海鳴る宵は一すちに頼む星さへ消え勝ちにして  
サンスター含みて仰ぐ六甲の綾線寄えて秋いよよ深し  
在り耐へて生きむ命も限りありと敢て迷ひしも口惜し今は

東京にて 林 鶴雄

磯野君に會ふ 一首

ミックス珈琲苦きのみつつ相共に神経を削るなりはひを敷く

白砂のさりさり立つる靴音はわが背ろにも續く一列(修學院)  
壽月觀と讀まれし茶屋の建物は細き柱に支へられぬつ  
水引草朱の如く咲くこの秋も病み臥す君かわが心重し  
歌を離れゆくとふ友の葉書ありコスモスにけさ霧ふりかかる  
うつそみを褐色なしてかまきりは雲を見てゐる秋も終りの  
ガラス戸を透きて光れる白雲が昏なして湧く怒りとも見ゆ

車中詠抄 酒井 青峯

停電の町をかへれば澄みわたる空や冷えて照る八日月  
停電のなき車内にてわれは讀む齋藤茂吉歌集小園  
帝塚山わが下車驛の近くなり歌集小園を靴にしまふ  
輕がると軌道をすべる音ひびき進駐軍専用車驛に入り来る  
昨日見しピカソの牧神奏樂圖ふと思ひ出づ終電車のなか  
歌集出すことを一つの脱皮としてこの道を更に深くきはめむ

柿と夕陽 宇佐美 喜三八

小屋めきし家に窓あり徑ゆけば幼きをみな兒われに手を振る  
柵に乗りて電車を見送る男のわらは夕陽あびたり顔一面に  
夕映のなかに舞ひ散る柿の葉の幽かに音する下枝にふれつつ  
運動會の音楽遠くきこえくる柿食べながら耳澄ましぬつ

楠一本 安田 章生

あかるさをしづかにたもち時移るひるの巷に霧のごとき雨  
若葉してあかるきときに通ひ路の楠一木をわれは愛する  
ひとしきりまた音たてて雨は降り犬小屋にわが犬はおとなし  
金剛の嶺はしづもる夕まぐれわが歸り路の空のはたてに  
人生のわが白壁に落書しすごしつつきてはやき幾年



九月歌會報

修學院歌會 本社九月例會は、九日、藤澤昭子氏の御配慮で修學院離宮を拜觀、青風先生御夫妻初め六十三名参加。秋雨煙る離宮の美を心ゆくまで鑑賞した上、林丘寺で歌會開催。心不安になりてくるとき林のなか定めなく行かれ一人行く(10點) 安田 章生 待ち疲れし窓邊に赤き夾竹桃あざやかなるに心いらだつ(同) 宮崎 定子

それぞれに孤獨を覺りて倚る窓邊吹きゆく風はいつも乾き(9點) 清原 令子 加東支社例會 十一日、中東條公民館で開く。藤原正司氏等十名出席。 二百年来を支へし大木村傳來のつやに手をふれて見つ 阪原 慶 阪南歌會例會 十六日、常塚山の酒井青峯氏宅で開く。出席者六名。 ゆつたりと山を拭ひて霧昇るいたはりの言葉わが欲る朝を 島下八重子 廣野歌會例會 二十二日、菅野村役場で開く。曾谷雅行、嵐川歳子氏等十一名出席。 僞りをも生きる術とし良心が小さくなつてゆくこの宵 本田 榮子 北灘歌會例會 二十三日、箕面の得光代氏宅で開く。阿部源二、宮崎定子氏等十一名出席。 あなたの聲わたしの聲が溶けあつて菱の小水の水面に落ちる 井部 菱子 阪神支社うばら例會 二十四日、今津の船員久仁子氏宅で開く。吉井薫、久保正雄、藤澤昭子氏

等十七名出席。會後、本社五周年記念大會の委員等居残つて準備のこと等打合せた。あふことが重たき悔いとなりつつも秋草の道急ぎゆきたり 佐藤 昌子 石海支社歌會 二十九日夜、偶々歸省の青風先生を囿んで、太子町吉福の安田勉氏宅で開く。首藤忠、前田孝、西村久雄氏等七名出席。 胸のちびに咲きかけしましまほみたる花ありて夜の虫をいぢめる 前田 孝

社中消息

○安田青風氏。「戀夕暮先生」三首を「詩歌」前田夕暮消悼號に、「生駒山」四首を「中外日報」(十月二日)に發表。十月五日、豊中市制十五周年祝歌(藝文募集歌詞)を田村木國氏と共に審査。同七日、草津短期大學に於ける滋賀縣短歌大會に批評と歌詠。同十九日、住吉大社千七百四十年祭奉賛歌詠の選者。 ○安田章生氏。「藤原定家」を「檀陰文學」第三號に發表。 ○得光代氏。短歌七首を「女人短歌」第三卷第五號に發表。 ○入江春行氏。「西洋に紹介された晶子の歌」を「短歌雜誌」第五卷第十號に發表。 ○佐竹昭廣氏。「凡浪考」を「國文學」第五號に發表。 ○川人吉士氏。稻葉まさ子氏と共に、住吉大社獻詠祭に於いて特選に入る。尙、藤田登美子氏も最高點歌として入選、十月十九日、それぞれ表彰を受けた。

○林鶴雄氏。「波切風景」(六〇號)及び「岩屋港」(三〇號)二點を秋の一水會展へ出品。尙、貞子夫人も「黄色い花」(三〇號)「静物」(一五號)の二點、同展に入選。 ○瀧口忍翁氏。「黒い山羊」(八〇號)「工場の歌」(二〇號)の二點が第十五回新制作展に入選。 尙本年から新制作派と創造美術とが合体して新制作協會と改名、日本語、洋書、彫刻、建築の四部門をもつこととなつた。 ○高井祥平氏。豊年製油株式會社へ入社、總務部次長兼調査課長に就任。 ○福田泰野氏。先般結婚され、酒本と改姓。 ○松本武史氏。尼崎市武庫川町二丁目七一〇に於いて理髮店を開業。

新入社友

(氏名) (住所) (紹介者) 玉置三男 兵庫 朝日和子 山下糸子 大阪 同 船内芳子 同 同 妹尾健治 同 同 堀内章三 同 同 田中克己 同 同 多尾荒雄 同 同 前田章生 牛尾義郎 同 同 前田 孝 田中義郎 埼玉 同 垂井深子 京都 同 門屋福子 大阪 同 桑山眞比登 同 同

發行維持費寄附

○六十口 藤澤 昭子 ○六口 安室 秀子

白珠社清規抄

入社 ●入社希望者は、氏名、年齢、職業 歌詠を明記の上、社費三ヶ月以上を添へ申込みのこと。 同人社友 ●同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、それぞれ特別、普通に分つ。同人、準同人は社友の中から力量充實した作家を推薦する。(同人、準同人、特別社友の内規は別に定める。特別社友内規御希望の方は申し越しのこと) 誌友は、雑誌購讀のみで、投稿せざるものとする。

編集後記

○前號の特集號の後を受けて、本號は經濟上の理由から普通號よりも遙かに縮小して編集した。御諒承頂きたいと思ふ。次號からは又、四十頁の編集に臨む豫定である。 ○白珠第二歌集の批評特集は近々行ふ豫定であるが、同歌集の批評文を廣く社中から募りたいと思ふ。同集は我等の研究資料として絶好のものであり、徹底的な研究が望ましい。 縮切は十二月十日、枚數五枚前後、といふことで御遠慮なくお書きの上御届け願ひたい。秀れたものは誌上に發表し、發表できない分があればいと思つてゐる。

つた。殘部があるものもそれぞれ若干である。裏表紙廣告を御覽の上、御買ひ下さるものあらば、よろしくお願ひ申し上げる。 ○全國大會は盛會裡に終つた。大會記は次號に掲げたいが、同大會のため特に諸事萬端御配慮願つた大會委員の方々の御苦勞はたいへんなものであつた。ここに記して、社中の方々と共に御厚禮申し上げる。 ○大會が終つた夜、西日本を襲つた台風のために、被害のあつた方も多かつたであらうか。遅ればせながら誌上を以て御見舞申し上げる。 ○新入社友の方の中、同人として迎へた方については、本欄を借りて簡單ながら御紹介申し上げることとする。今月より参加された田中克己氏は、詩人としてすでに知名の方で、多くの詩集の他、評論、譯詩の著書があるから、御存じの方が多いことと思ふ。

白珠 第六卷 第十二號 定價五十円

昭和二十六年十一月二十日印刷 昭和二十六年十二月一日發行 大阪府豊中市新免七五七 大阪府豊中市新免七五七 編輯者 安田 喜一郎 發行者 安田 喜一郎 印刷者 篠田 健次 印刷所 株式會社 萬年社

投稿

●毎月、短歌一人十首以内及び文章等隨意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切。 ●原稿の初めに所屬欄名及び氏名を明記のこと。 ●一首を二十七字以内に書くこと。

●酒井青峯氏の歌集「白木樺」も美しく出来上つた。すでに御買ひ下さつた方も多いが、未だの方は至急お求め願つたら、と思ふ。同集の批評特集もそのうち行ひたいが、同集をお讀みになつた方は、出来るだけ批評なり感想なりを書いて直接著者宛でも、又社宛でもよいからお送り願ひたい。その中の或るものは誌上に掲げたく、掲げない分も著者には深い喜びとなるであらう。 ○白珠第二歌集、焦點は賣切れとな

○お元氣でよき新春をお迎へになるやうお祈り申し上げる。(章生)

大阪府豊中市局内新免七五七 發行所 白珠社 振替大阪一〇三三九〇番



# 白珠

新年號



第七卷 第一號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十六年五月二十一日國政特別取扱承認雜誌第一、九七六號  
昭和二十六年十二月二十一日印刷 昭和二十七年一月一日發行

白珠 SHIRATANNA 第七卷 第一號 通卷 六十號

阿曾沼京子遺稿集 猪鬚弦一朗裝幀

B6判 一〇〇頁 美本  
頒價 一二〇円 (送料共)

生前、白珠社友として白珠に作品を發表されてゐた京子さんを、私は、將來性ある人として注目し、その秀れた素質を愛惜してゐた。しかるに、京子さんは若くして亡くなられ、私は悲しみに堪へなかつたが、こんど、遺稿集として、病床日記抄、短歌、俳句、詩がまとめられ、それに母君の長文の思ひ出の記が附載されて、阿曾沼さん御一家と親しい猪鬚畫伯の装幀も美しく刊行された。私は、このことを悲しみのなかにも嬉しく思つてゐる。

ほのぼのと暖き日よ春近く花の芽のこと話す  
聲する

この歌から集の名はつけられたのであるが、まことにこれは美しく惜しみてもあまりある「花の芽」である。母君の筆も美しく、ペーソスとユーモアとにちりばめられたその文は、花の芽そのまゝの京子さんの生涯を生きたきと描き盡くしてゐる。私は、深く感動した。美しい母子抒情である本集を、私は、世の若い方々にも母たる人にも読んで頂きたいと思ふ。

—安田章生—

取次所 大阪府豊中局區内新免 白珠社

賀 正

昭和二七年元旦



今年もつよくて、はきよい  
セカイチヨ一運動靴を

世界長ゴム株式会社

本社 大阪市淀區豊崎西通二ノ七  
電話豊崎七三六―七三九  
工場 大阪・西宮・京都・徳山



抱えいでゆまりをさすと構へしが眼りこけたる重み切なし  
従兄弟ども遊ばせおきて妹と生活の事に觸れて語りぬ  
いやはてのきはみの日まで鳴きつける虫の命を羨しと云はな  
醜くも疑ひてゐるこの心知られなばよし知られねばよし

母

川人 吉士

かたくなの父に仕へてわが母は七十七の今もひまなし  
ひたすらに孫の成長へ望み掛け重労働の母の手のしわ  
齒の抜けし口を開きて眠る母見てゐる我は涙しながる  
七十七母は老いたり脊を曲げて杖の代りのうは車押す  
四十余年われを育てて老いませり夕陽の井戸に水を汲む母

秋日常

藤原 優

風吹けば舞ひおつる松葉身近くに散り来て秋の山ひえびえし  
斷崖の根方に川をおひよせし稻の平は夕映えにけり  
塩鹵妻は焼くらし菜畑の角曲るときすでに匂ひ來  
顯はれし岩といへどもたぎつ瀬のしぶきにぬれて月に光れり

三首

西島 貞子

梳る手を膝に置きもだしぬぬこの手紙君も苦しみ書きけむ  
君が住居さがし當てたる安けさにそこら邊りを歩きもとほる  
誰もたれも心貧しよ戀愛結婚誇れる言葉さげすむ腫

シユウクリム

西尾 朱由

貨車通るいつもの頃に目覺めぬて明方までの長きをかこつ  
廣島の壇上に玉歩近づく時迷ひ出でし小狗に微笑まれしよし  
ロンドンのシユウクリムは甘味足らずと歸朝者某氏は語りたり

秋風がさやさや吹くよ白墨の童畫の犬の笑へる路上

深澤峽村氏令嬢

おおさかと假名で書く子が病院と漢字にて書けるこの不幸はや  
病む父に心づながる日々ならむ正しく書けり病院の二字

十月七日

安田 佐和乃

大徳寺寶物拜觀

秋晴るる空氣のなかに匂ひたち古き宝物はわが眼を捉ふ  
一山を開きたまひし自画像の眉間に凝れる光するどし  
勉強の足らざるわれに吐息してこの宝物の部屋出でむとす

村しぐれ

得光 鶴代

村しぐれつかの間にして青あをとびえゆく空に夕茜滲む  
眼の見えぬ仔犬らが乳に縋り寄るすがらせて眼を瞑りある親  
十月も終りとなりしある夜半に心止めきくこぼろぎのこゑ  
ある友がかなしき戀になやむうた讀めども今の心ひびかず  
青く固き柚子の實ひとつ轉ばせて今宵のわれは脆くはかなき

シンガポール

田中 克己

愛すること妻にはしかずしかはあれど陳妙貞が命かなしも  
紅き花あまた咲きたる垣のべにコーヒー飲むとなれと連れ立つ  
たたかひのきびしさを知らずひたすらに南の國にこひを思ふも  
わが命短くあらむそのゆるにいよかなしきをためが子るは

隣雲亭

酒井 青峯

コバルトに澄みとほりたる秋空を車窓斜めにとぶ白き雲

一つの善意

三宅 登美子

生理のごと胸迫りくるこの夜の慕情の網を手繰らうとせず  
人情に餓えたるわれが片寄りにおもふことあはれ只金のこと  
道徳がわれの行手をさへぎると憤る時はや據り所もあらぬ  
弱々しい一つの善意が喰ひとめて離さぬ時にわれ哭きにけり  
想ひ出を振り捨てふりすて歩みきてわが現身に抱くものなし  
どのやうにも未來はあるといひ乍らこれ以上淋しい坂が下りて行けやうか

工員

吉井 薫

ああわれは孤獨でありぬむき立てる工員しきりに抗辯すれば  
この俺に任せておけと言ひきりぬ三人子を持つ工員に向ひ  
表情に幾分の修正がなされぬて朝の事務所の光浴みある  
すしづめの鼻の頭にふれ來る安香水に私は疲れる

月の出

永瀬 翠明

寺庭に秋陽澄めれば咲きのこる百日紅の花はそぐはぬ  
寺庭を耕して大豆作りたるあとかたもなく世は移りたり  
掛けかへし桶の輪竹の鮮しきみどり冷ゆる庭の陽かげに  
ひやけ田刈り來し稻は幾許も穂を着くるなし牛に食はしむ  
台風の過ぎし夕べよ田かななる月の出潮の空の和らぎ  
麥蒔きを危く終へて畑土にしみゆく雨をぬれつつぞ見る

言葉の刺

島下 八重子

月浴びて露じめりあるなつかしきし忘れぬし白シャツを抱く  
白髪抜くわれに鬼氣ある夜更けにて善根もなき魂寒し  
一度は素直に開きて別れしが言葉の刺に氣付きよろめく

秋空の澄みきはまりしまなかに生駒の山がありて親しも  
すずかけの落葉吹かれて溜りたる緩行車道に入りゆけるバス  
ガスタク二つならべる向うには夕陽に染みて六甲の山  
夢のごと睡蓮咲ける臥龍池の水の面煙りてふる細き雨(修學院)  
隣雲亭の一二三の石に連想す山羊や仔鹿の小さき足跡

病床拾遺

深澤 峽村

いささかの風ある夜を安らぎて身動きならぬ裸身をさらす  
夜の灯に寄りくる虫の一つともはかなきいのち吾は愛しむに  
吉田全權ただ今調印と告ぐる聲うるみてあるは忘れずあらむ  
講和後に來たらむ苦難思へども額あげて吾等生きて行くべし  
原爆にて守る平和と思ふとき夜床の上に泪たれたり  
三日三晩うめきし聲も細りゆく生のたかひを終らむとして  
明日の不安に怯えをりしが子に書きぬ父の如くに病むことなかれ

清風抄

宇佐美 喜三八

天高く風清む底に家ありて妻の聲する子のこゑきこゆ  
夕日ざし横にあかあか流れぬつ風は音なく柿の葉散らす  
散り落ちし柿の葉ひとひら踏むだにも宿命と見て安けくあらむ  
人間の心にひそめる愁へあり風吹く夕べしみにらに湧きくる

表情

安田 章生

夕かげの擴りきたる部屋のなか灯ともして静けき君が表情  
空つぼの戸棚も扉とざすとき何かありげにわが前にある  
いらいらと蟬鳴くまひるいちじくの葉蔭に小さくわが犬眠る  
日のくれの巷をよぎる歩み遅し乳房醜く垂れし緒き犬  
君行きて住むとき秋は深からむわが知らぬ遠き北國の町



頌

春

昭和二十七年元旦

白珠社同人

- 阿部 漂二 大阪府豊中市千歳通二丁目二
- 飯森 米藏 新潟縣長岡市新潟大學長岡分校内
- 井藤 勝太郎 大阪市東淀川區堀上通一丁目二二
- 宇佐美 喜三八 大阪府箕面局區内牧落白樂莊
- 大井 秀子 兵庫縣宍粟郡山崎町西鹿澤
- 岡崎 諦 愛媛縣喜多郡新谷村喜多山
- 奥野 松吉 大阪府豊中市麻田一二四七
- 奥 恒 兵庫縣洲本市上内膳
- 乙黒 今朝三 山梨縣那珂川町片山五七二
- 小野 三沙子 大阪府布施市葦屋西樟蔭學園内
- 小野 ゆり子 神戸市東灘區本山町北畑四〇
- 梶 紫峯 大阪府守口市土居七八六

- 門田 俊一郎 大阪府瀧寺公園町一ノ二七
- 川人 吉士 徳島市矢三町
- 岸本 千代 大阪市阿倍野區北島東二ノ一五
- 木村 五六 明石市西魚町二〇
- 久保 正雄 兵庫縣伊丹市平林町五ノ三五杉田方
- 小畑 光城 兵庫縣宍粟郡神戸村安積
- 小堀 保三郎 西宮市松下町三二
- 酒井 青峯 大阪市住吉區帝塚山西四丁目一三
- 佐藤 昌子 芦屋市伊勢町一六ノ二
- 執行 作彌 大阪市北區絹笠町堂ビル二階
- 島下 八重子 大阪市西區九條通二丁目四五
- 杉野 としゑ 大阪府阿倍野區阪南町東一ノ三四
- 鈴木 光秋 神奈川縣川崎市久本東京縣系川崎工場
- 田中 雨花 大阪府豊中市隈野田北町
- 田中 克己 大阪府布施市西堤町六〇七
- 田中 信子 大阪市都島區高倉町二ノ一〇四〇
- 高井 祥平 東京都杉並區下高井戸四ノ一〇四六
- 高橋 繁子 東京都北多摩郡小金井町梶野二四〇
- 辻本 和子 奈良市佐保川町
- 徳永 半二 福岡縣八幡市景勝園

- 得光 鶴代 大阪府箕面局區内平尾紅葉通八
- 永瀬 翠明 島根縣鏡上郡鞆原村
- 中西 明 島根縣海瀨局區内須賀
- 中村 秀哉 大阪府中河内郡岸津町鴻池府營住宅六五號
- 中山 千種 神戸市東灘區住吉町彌川一三一五
- 西尾 朱由 芦屋市月若町七六
- 西島 貞子 西宮市川東町四七
- 野口 トミ子 大阪府豊中市服部二〇四
- 畑山 軍治 兵庫縣龍野市坂西町小畑三三八
- 濱口 忍翁 大阪府布施市永和二丁目三
- 林 慶太郎 大阪府箕面局區内
- 林 鶴雄 兵庫縣龍野市龍野町徳城
- 原 三吉 堺市三國丘療養所新館八號
- 藤澤 昭子 東京都杉並區高円寺五ノ八〇三紫雲荘
- 藤原 昭優 大阪市住吉區墨江中一丁目四五石濱方
- 深澤 峽村 兵庫縣加東郡中東條村新定
- 松岡 秀夫 岩手縣宮古市地方病院一ノ三五
- 三宅 登美子 兵庫縣赤穂郡有年村
- 安井 俊二 大阪市城東區彌目町四丁目四
- 兵庫縣宍粟郡山崎町門前

- 安田 章生 奈良市法蓮北町一三一四
- 安田 佐和乃 大阪府豊中市新苑七五七
- 安田 青風 同
- 八波 和子 高知市朝倉高知大學官舎
- 山本 信實 東京都杉並區和泉町三二八
- 吉井 薫 神戸市東灘區御影町濱中三八一
- 吉崎 郁 大阪府阿倍野區松崎町一ノ二八
- 吉田 彌壽夫 奈良市法蓮町一ノ二三九

新年懇親歌會

附、「白珠第二歌集」「壁」「紅しぼり」出版記念

- 日時 一月十三日(日曜)午前十時から
- 會場 大阪府職員會館・階上廣間
- 會費 五十円
- 内容
  - 1 「白珠第二歌集」「壁」「紅しぼり」の編者並に著者の感想
  - 2 右三著に對する讀後感
  - 3 詠草披講(新春詠又は近詠一首を一月五日までに本社宛送付のこと、出欠豫定も書添へること)
  - 4 福引・余興(新春らしく楽しく和やかに遊ばす存じます。)

備考 晝食お辨當は御持參下さる。



十月歌會報

加東支社例會 九日、中東條村公民館で開く。藤原優等十一名出席。

野末までしばし明るき夕映のそのひとときを  
もゆる曼珠沙華 松本 才逸

廣野歌會例會 二十日、廣野村役場で開く。曾谷雅行等十名出席。

友のいふ悲しきはわれも持ちをりて落葉の鳴るを聞きしめ歩む 勝井 保

阪南歌會例會 二十一日、黒山村蓮光寺(清原令子宅)で開く。酒井青峯等八名出席。

暗れ切った秋の日たかし姿なき小鳥のこゑもはるかにきかむ 佐藤 義信

世界長歌會例會 二十六日、大阪工場食堂別室で開く。石岡喜代子等七名出席。

ゆくりなき邂逅なれど先づは寄りわかれの肩邊の暁はらふ母 夏至 雅博

阪神支社うはら例會 二十七日、今津の鮎貝久仁子宅で開く。出席者十七名。

誰彼にやさしくなつてゆく父の齢さびしみ今日も暮れたり 深川 葉子

京都市支社例會 三十日、林彌生宅で久しぶりに開く。三木壽子、佐藤美知子等十名出席。

沈黙は深きやすらぎ重ねたる手にお互の血の滯かさ 三木 壽子

社中消息

○安田青風 十月二十六日、毎日新聞社に於ける大阪歌人クラブ秋の短歌祭に選評。十一月三日

白珠社清規抄

入社

入社希望者は、氏名、年齢、職業歌歴を明記の上、社費三ヶ月以上を添へ申込みのこと。

同人社友

同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、それぞれ特別、普通に分つ。同人、準同人は社友の中から力量充實した作家を推薦する。(同人、準同人、特別社友の内規は別に定める。特別社友内規御希望の方は申し越しのこと) 誌友は、雑誌購読のみで、投稿せざるものとする。

社費

一ヶ月社友六十円、誌友五十円(療養者學生は申出により誌友費にて可) 社費切の時は直ちに送金の事。退社の際はその旨申し出る事。 送金は所属欄を明記し、なるべく振替を利用のこと。

投稿

毎月、短歌一人十首以内及び文章等隨意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切る。 原稿の初めに所属欄名及び氏名を明記のこと。 一首を二十文字以内に書くこと。

尼崎市立高校に於ける同市文藝祭短歌大會に「抒情の問題」について講演。同四日、榎原神宮前奈良縣民生會館に於ける白珠大和支社創立歌會に歌話と選評。同十二日、島田信子株式會社秋季短歌大會に歌話と批評。 ○宇佐美喜三「大陽雪道の歌論について」を「國語と國文學」(昭和二六・一一)に發表。 ○田中克巳「詩作品を『日本現代詩大系』(河出書房刊)第九巻に登載。 ○望月眞暎「秋の文化祭和歌山縣伊都郡短歌會及

白珠西播短歌大會

一月六日(日曜)午後一時から、兵庫縣揖保郡太子町石海小學校で。會費三十円。 當日は、安田青風先生の「現代生活と短歌」と題する講演の外、詠草披講、懇親會等あり。 近詠一首は、一月三日までに前記小學校氣付首藤忠宛送付のこと。

主催 白珠石海支社

び俳句會に於いて、それぞれ作品入選。 ○吉森綾子 大阪歌人クラブ秋の短歌祭に於いて作品入選受賞。 ○加藤安恩 相市市文化祭に於いて、短歌作品一等に入選。 ○中村秀哉 このほど長男出生、幸彦と命名。

定例推薦者氏名

同人へ 奥 恒 畑山 軍治

編集後記

○謹んで新春のおよろこびを申し上げます。本年もいよいよ上御精進の上相變らず白珠のこともますます御盡力、御協力賜はりますやうお願い申し上げます。

○定例の推薦を本號で行いました。新同人の奥、畑山兩氏は共に歌歴も古く最近特に目覚ましい精進ぶりを示されてゐる方です。奥氏は洲本高校教官、畑山氏は播磨造船所人事課主事です。なほ、定期推薦の度毎にいつも書くことですが、投稿には必ず規定通り所属欄名を初めにお書き下さい。書いてないために間違ふ向きがままあります。

○東大教授久松潜一博士から、御多忙のなかを貴重な玉稿を頂戴いたしました。先生の御好意に對し厚く御禮申し上げます。

○昨年度に連載して好評を博しました父の「白珠作品抄」に代つて、當分、合評を連載いたしますことになりました。研究的にやりたいつもりでありますから、氣が附かれたことなどはどしどし御聞かせ下さい。

準同人へ

齊藤 好生 吉森 綾子 西村 久雄 山崎秀二郎 岡本多津子 廣岡しげ子 則岡 玲子 松井 正子 長谷川則文

作品三)

近藤 清子 小川 晴夫 久保敏太郎 金子三枝子 中川 儀門 山本キヨノ 勝井 保 杉本 壽子 曾谷 雅行 竹原 幸彦 笹部 綾子 朝日 和子 野見山隆之 夏至 雅博 磯村嘉千雄

新入社友

(氏名) 東野美都子 大阪 杉野としゑ 佐伯重榮 奈良 島本正齊 伴野恵美子 同 同 島本 成子 同 同 佳田丘潤也 東京 同 足立 幸子 神戸 同 高桑登世子 石川 光原 早苗 上田 益子 大阪 同 前田リユ 赤穂 同 谷川壽美子 同 伊倉あき子 佐々木 富美子 同 同 藤井 靖子 同 同 荒井俊一郎 京都 同 佐藤美知子

定例歌會案内

毎月第二日曜日に大阪府職員會館(市電天満橋又は府廳前下車、知事官舎北隣)で正午開會、午後四時閉會。會費二十円。 詠草は、前月末までに葉書に歌會詠草と明記して社宛に近詠一首送付のこと。

白珠 第七卷 第一號 定價五十円

昭和二十六年十二月二十日印刷 昭和二十七年一月一日發行 大阪府豊中市新免七五七 發行所 安田 喜一郎 大阪府豊中高麗橋五丁目三五 印刷者 篠 田 健次 大阪府豊中高麗橋五丁目三五 印刷所 株式會社 萬年社 大阪府豊中局區内新免七五七 發行所 白珠社 振替大阪一〇三三九〇番



# 白珠

三月號



第七卷 第三號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回)日發行  
昭和二十六年五月二十一日國鐵特別取扱承認雜誌第一九九七六號  
昭和二十七年一月二十日印刷 昭和二十七年三月一日發行

白珠 SHIRATAMA 第七卷 第三號 通卷 六十二號

酒井青峯 著	白珠叢書第二編	價二〇〇円(送料共)
歌集	白木樅	
序文	安田青風	
裝幀	棟方志功	
歌數	約五百首	
安田青風歌集	街空	(品切)
同	歲月	(品切)
安田章生歌集	茜雲	(品切)
同	心象	(品切)
同 歌論集	現代短歌ノート	價五〇円(送料共)
小野三沙子歌集	壁	價八〇円(ク)
藤本伊都子隨筆集	紅しほり	(品切)
白珠知的抒情歌集	焦點	(品切)
白珠第一歌集		價一一〇円(送料共)
白珠第二歌集		(品切)

取次所 大阪(四甲)新第七五七 白珠社

振替大阪二〇三三九〇

● 創元社新刊

戸板 康二編

歌舞伎手帖

寫真版二〇頁・三四頁  
定價 三三〇円

若い人々のために、古典演劇のおもしろさを理解させる  
完璧な歌舞伎入門書。

吉井 勇著

戀愛名歌物語

本文 二〇〇頁  
定價 二〇〇円

時をこえて萬人のこころ動かす戀の名歌を、萬葉集、古今集はじめ與謝野晶子、石川啄木、若山牧水、伊藤左千夫、北原白秋の作より選び、これを立体化した美しい物語繪巻。

筈見 恒夫著

映画五十年史

寫真版四六頁・四〇〇頁  
定價 三八〇円

映画の歩みと成長を共にした著者の才筆に生かされたスクリーンの秘密、往年のスター、監督の群像より戦後の名作に及ぶシネマ五十年の哀歌史。



夢の花美しければ籠に挿しわが亡き父を戀はむとぞする  
父逝きて二年へたるふるさとの庭べに苔は深く匂ひつ  
秋ふかし朝夕べに冴ゆる月人妻となりてすでにいくとせ  
ふるさとの秋草原に吾子と来てこぼろぎの飛ぶを見てたりけり

初老

畑山軍治

沈黙も救ひとならず夕昏の火鉢に甘く語が焦げて居る  
鎖曳きひそげく犬が越して行く踏切は今赤いシグナル  
海底の屑鐵あさり舟の上は何をいさかふ語のアクセント  
飯釜の湯氣に今宵は温めて初老を迎ふ吾が手を見たり

自行不怠

原三吉

おもむろに深まむ冬を思はせて朝夕に冷ゆるわが病室のなか  
窓寒くひびくは何の聲かとも病みて久しきからだを拭ふ  
虚無の場に安らぐ日々を寮外の畑の甘藍ますます青し  
風雪を凌ぎてここに來しこともただ無爲といふ二字に終るか

冬の白百合

西島貞子

遠います君が還曆を祝ひたる冬の白百合かぎて眠らむ  
藍深き代田の空に望みし富士健かに清くわれを生かしめ  
薄ら陽の恒春園の雑木道腕組みて子の歩み閑けし  
風花のちらりほらりと粕壁の芦花園へゆく石ころの道

富士寫生

林鶴雄

富士の雪杉木立を透き見ゆるとき眼をいたく射てその白さ  
逆光の峯に雲わき裾野分けて一條の流れS字状をなす  
つらら尺餘垂れたる軒に唐蜀黍の原色の黄が不調和在り

眼の前のたしかなる幸思ひぬる今の二十代をそしることなかれ

建て札

西尾朱由

歳晚の雨の夕べを驛に來てスト止みしてふ白き建て札  
菜鳥に夕べの風の牙々と遠くの町に灯がつき初むる  
八十七の雜學博士逝きませり聞き残すべきこともありしに

穂すすき

安田佐和乃

穂すすきに映ゆる夕日は騒めきてひと色に躍る銀の波、波  
夕まけて風や強し片なびき狂ひきらめきすすきの穂原  
生駒山その夕ぞらにゆくりなくゑがける銀の波すすき原  
薄穂のかもす穂わざの美しさこゑ放ちわれは立ちどまり見る

年頭吟

田中克己

初夢に出で來しなともたはやすく物言はず來て覺めてくやしも  
わが思ひ通はずあれと思はねど山河越えて何の神ぞも  
泪もて綴る日記を書き繼がむ心ほとほとわれと釋き得ず  
かのをとめ煖爐に倚りて骨牌繰りわれを忘れてあるが如しも  
にがよもぎ苦しありぬ國亡び戀にやぶれて市に飲むとき

批把の花

得光鶴代

さびしさのいやまる夜の床ぬけて花の匂ひをまた嗅ぎに來し  
人を戀ひ鳴ける仔犬を霜凍る戸の外に出す今宵邪険に  
批把の花開かに咲けばさびしさの記憶まざま母逝きし日よ  
くるしみの末だ足らざりしかはあれど充血の眼は鏡にうつる  
外暗くなりて假睡の目覺れしが鶏小舎の鶏しづかになりぬ  
はなやかに心をらむときめたれば洋酒のグラス發意して乾す

もの音の絶えし夜空に書間見し富士の聳てるをわれは想はむ

年頭狀

小堀保三郎

時めきし人なりしかば年頭狀の自筆はさびし薄き墨にて  
寫眞入りの參議院議員の年頭狀はビラの如くに空々しかり  
かにかくに業を守るは常ならじ行先知れず舞ひ戻る賀狀  
思ひ起せぬ名としいへども年頭の葉書は嬉しき言葉にて  
墨書の女文字のうるはしき年頭狀に淡き想ひ出

父われ

中村秀哉

妻と子の靜かに眠る部屋に來て吾のころはゆさぶられぬる  
父われの葬ひをなす責負ひて生れ來し子がいま眠りをり  
いたはりの言葉激しくさへぎりてこの少年の冷たきひとみ  
人間をなべて憎しみぬると言ひたぢるぎもなき少年の瞳よ

年の瀬

藤原優

吃る子が寝ごと言ひたりすらと寝ごと言ひたり試験すみし夜  
子ら皆に手紙を書きぬ幸うすき娘への便りは長くなりたり  
メーターとなしし電燈部屋々々につけ廻る子ら消し廻る妻  
孫三人里歸り來て老妻は一日にして目が廻るとふ  
孫らみな歸りしあとを大水の引きたるごとく妻と居對ふ

たしかなる幸

八波和子

新しき年あけぬれば新しきものくる如き不思議な錯覺  
わたくしは俗事多端にてといふ手紙日常生活は俗事なるらし  
旧姓と小さく括弧してありてつひに結婚せしをしりたり  
感傷的な手紙をかいたことが今愧かしさとなりて心にかへる

ふるさとの道

酒井青峯

講和自立の年明けにけり晴れわたる空にうかべる風二つ三つ  
ま白なるビルにはためく日の丸の向うにかすむ六甲の山  
うすぐもる空の下びにたち並ぶ片側町のけふの日の丸  
再軍備の重壓が更にのしかかる昭和二十七年のわれらの上に  
霜柱踏まれしままに凍みつきて光れるならむふるさとの道

鴉

深澤峽村

寒ざむと光りたもてる枯山に群りて晝の鴉は啼かず  
何ひとつ働けぬ身と思ふとき夜空にきよく星ながれたり  
すでにして不惑もすぎし吾がいのち安らく程の場も持たずして  
一群の鴉がすぎし冬のそら餘光もあらず昏れてしまへり  
天井につきぬし蠅か日がさせば舞ひおりて來ぬやがて死ぬべく

谷間

宇佐美喜三八

斷崖の樹の幹いだきかへりみる谷間は深く水の音する  
日もすがら岩に激して谷底にとよめる水の音はかはらず  
人ありて踏み開きけむ細き徑草にすがりてわが登り來し  
山道の櫻の裸木小枝ゆれ水音寒し春は遠きか

運命

安田章生

人類の善意と理性信ずると言ひ切るときに拍手はやまず  
人らみな不安のなかに生き繼ぎて時代の運命といふ事も知る  
逃れがたきわが運命も我は知る汝とゐるときよけい孤獨にて  
常識はつねに冷たし心怒り夜ふけをひとり石橋わたる  
さらば彼等安穩にすこせ疑はず古き倫理のなかに生きるもの



十二月歌會報

本社例會 定例日の九日、大阪府職員會館に於いて開催。出席者十八名。

店先につながられてみて犬眠るつながられるは安心なるか(5題) 安田 青風

大和支社例會 二日、大和高田市の島本正齋宅で開く。佐野美代子、谷口米子等六名出席。

頼めなき友と思ひつつふみを書く秋の夜更の遠き稲妻 島本 正齋

加東支社例會 九日、中東條中學校に於いて、文化博覽會の一環として開催。藤原優、飯尾秀平等二十四名出席。

親だてを垂べし土間の狭さにも足らひて明日の摺り番を待つ 藤原 正司

世界長歌會例會 十一日、第一會議室で開く。夏至雅博、山下糸子等九名出席。

湯上りのほのほの紅き爪のいろ矢ひしもの蘇り來る 朝日 和子

石海支社例會 十五日、石海小學校に於いて、西播短歌大會の準備會を兼ねて開く。林鶴雄、前田孝、百藤忠等三十名出席。

茶瓶より湯氣ひろがれば理を張りし人の視線も余々にうるみ來(10題) 畑山 重治

吾ゆく無禮の我が容赦なき雨は邪心を洗へといふか(8題) 松岡 秀夫

廣野歌會例會 二十二日、廣野村役場で開く。曾谷雅行、勝井保、安威實美子等十一名出席。

蝶蜂の死骸一つが轉がりてこの露地は初冬の風吹き通る 本田 榮子

阪神支社うばら例會 二十二日、今津の鮎貝久仁子宅で開く。西島貞子等十三名出席。

しづかなる光こぼるるひとところ冬草は土にほえかけもち 土居 時雨

社中消息

阪南通信歌會 今月は通信歌會とし、二十四首の詠草に對し十七名の選歌通信があった。

安田青風 「新年の歌」五首を「大阪人」一月號に、「平和の春」五首を「みをつくし」二月號に、

新年の歌一首(出紙揮毫)を「大阪編業新聞」(一月一日)に、「正月」五首を「中外日報」(一月五日)に、「歌壇と政治」を「短歌雜誌」

新年號に發表。一月六日西播短歌大會、同九日靈屋若草會、同十四日、短歌と教養の會(皇中公民館)に於いて夫々歌話と批評。

安田章生 「百人一首」を「朝日新聞」(大阪一月五日)に、「短歌を作る家庭婦人に」を同(一月十七日)に發表。

酒井青雲 「追放解除」八首を「日本歌壇」第六號に、「初春」五首を「あをぞら」新年號に發表。

得光鶴代 短歌作品七首を「女人短歌」第十號に、「五年の春」五首を「みおつくし」一月號に發表。

吉田彌壽夫 「意識」五首を「徳島短歌」一月號新報作品集に推薦發表。

川人吉士 「風の如く」五首を「短歌雜誌」新年號に發表。

土居時雨 「眞夏の肺」五首を「短歌雜誌」新年號に發表。

年號に發表。

島本正齋 「海光」八首を「日本歌壇」第六號に、「天の橋立」五首を「短歌雜誌」新年號に發表。

岡本多津子 安部忠三選「高知新聞」新年文藝に短歌作品入賞。

林 鶴雄 雪中富士寫生のため、忍野温泉に一月中滞在制作。

新入社友

- (氏名) (住所) (紹介者)
山村 芳治 奈良 得光鶴代
矢野 登悦 兵庫 兵庫
石原 六郎 埼玉 埼玉
内野 六郎 埼玉 埼玉
鈴木 龍二 岩手 岩手
當麻 龍二 奈良 奈良
田中 耕作 西宮 西宮
山田 光雄 下關 下關
光井 弘子 姫路 姫路
高田 和雄 兵庫 兵庫
山田 正幸 大阪 大阪
川田 良一 同 同
松下喜久子 富田林

發行維持費寄附

- ▲二六〇 藤本伊都子氏 ▲二〇〇 林鶴雄氏
▲一〇〇 川人吉士氏 望月眞咲氏 ▲二〇〇 日久保敬太郎氏

白珠社清規抄

入社

入社希望者は、氏名、年齢、職業、入社希望者は、氏名、年齢、職業、歌歴を明記の上、社費三ヶ月以上を添へ申込みのこと。

同人社友

同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、それぞれ特別、普通に分つ。同人、準同人は社友の中から力量充實した作家を推薦する。同人、準同人、特別社友の内規は別に定める。特別社友内規御希望の方は申し越しのこと。誌友は、雜誌購読のみで、投稿せざるものとする。

社費

一ヶ月社友六十円、誌友五十円(療養者學生は申出により誌友費にて可)
社費切の時は直ちに送金の事。退社時はその旨申し出る事。
送金は所屬欄を明記し、なるべく振替を利用のこと。

投稿

毎月、短歌一人十首以内及び文章等隨意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切る。
原稿の初めに所屬欄名及び氏名を明記のこと。
一首を二十七字以内に書くこと。

編集後記

○近頃、短歌復興の風が見えるといふことである。これは結構なことである。抒情詩を不當に輕蔑することは結局その人の人生を不幸にするだけのことであらう。短歌形式が、日本の抒情詩の形式として生命を持ち得る限り、短歌に親しむ人が多くなることは望ましい。戦後の慌しさのなかで詩を見失つてみた多くの人も、近頃は自分の人生に詩を求め始めたのであらう。自分の人生に自分の歌聲を持つといふこと、これは結局、自分の人生を自分で愛し、掘り下げ、深めて行くといふことにはかならないはずである。

○ただ、これまででどうかすると、短歌及び歌人が、近代日本の中に残存してゐる古さで、より多く結びついてゐたことは否定できないのであつて、最近の短歌復興が、反動化と結びつくやうな傾向が萬一にもあればそれは嚴に排除されねばならないことである。

○ともあれ、われわれは、この人生に詩を求め、それゆゑに歌を作つて行くであらう。白珠の仲間が、最近いよいよ増しつゝあることは、愉快なことである。

○本號は、白珠第二歌集評を特集した。總評としては、寄せられた原稿の中、乙黒氏の一文のみを採用したが、今回のことに限らず、採否は御一任の上、散文も御遠慮なく寄せられたい。それにしては第二歌集の刊行は、いろいろの意味で有意義であつたと私自身考へてゐる。今後の展開を期せねばならぬ點も多々あるとはいへ、同集は讀んでおもしろく、清新潑刺の氣に充ちたものであることを喜ばしく思つてゐる。省みるべきは深く省みて克服して行くと共に今後の精進を共に期したい。

○一月號でお願ひした阿曾沼京子さんの遺稿集「花の芽」は、刊行後間もなく品切れとなつて、御申し込みの遅れた方にはお送りできなかつた。それらの方々の御好意を感謝すると共に、御了承を得たいと思ふ。

○「白木樺」の出版記念會は、昨年十二月十六日に開かれて盛會であつた。次號を同集の批評時集號とするので記念會の記事も次號に掲げる。

○新年歌會は、小野三沙子、藤本伊都子兩氏を圍んで盛會であつた。その記事も四月號に掲げる。

○「紅しほり」及び拙著集「心象」は品切れとなつた。御好意に對し厚く御禮申し上げる。(章生)

定例歌會案内

毎月第二日曜日(大阪府警クラブ(市曹馬場町下車、大阪中央放送局南半丁))で正午開會、午後四時閉會。會費三十円。
詠草は、前月末までに葉書に歌會詠草と明記して社宛に近詠一首送付のこと。

白珠 第七卷 第三號 定價五十円

昭和二十七年二月二十日印刷 昭和二十七年三月一日發行

大阪府豊中市新免七五七 編輯者 安田喜一郎
大阪府東區高麗橋五丁目三五 印刷者 篠田健次
大阪府東區高麗橋五丁目三五 印刷所 株式會社 萬年社

發行所 白珠社 振替大阪一〇三三九〇番



# 白珠

四月號



第七卷 第四號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(第九九四二)日發行  
昭和二十六年五月二十一日國鐵特別送付承認(第九七六)日發行  
昭和二十七年三月二十日印刷 昭和二十七年四月一日發行

白珠 SHIRATAMA 第七卷 第四號 通巻 六十三號

酒井青峯著

歌集 白木樫

白珠叢書第二篇  
B6版 一六〇頁 美本  
價二〇〇円(送料共)

昭和二十二年から二十六年にわたる五年間の作品から五百首を自選した著者の處女歌集である。齡五十を過ぎてなお孜々と歌の道に勵んで疑を持たぬこの作者の質實な生への希求哀歌が目立たぬ中に滲み出て好感の持てるものが多い。「産業經濟新聞」の批評の一節

大阪市住吉區帝塚山西四丁目十三

取次所 黎明社

振替大阪一八三四二番

現俳壇に太陽の如く!!

新俳句新聞

主幹 山田 青波  
月刊 タブロイド版  
一年 百五十円

戦後の混沌たる俳壇に「先づ秩序を！」叫んで創刊、以來六年、今や一萬の讀者を有し俳壇唯一の報道紙として紙價を高めてゐます。

大阪市北區堂ヅル一階 至誠堂内

新俳句新聞社

振替大阪八四〇八八番

## 白珠春季大會御案内

恒例の春季大會を、今年は左の通り大和の當麻寺で開催することになりました。當麻寺には、中將姫で名高い曼陀羅堂を初め、多くの國寶があり、會場の中之坊も、庭園は大和三名園の一と稱され文部省指定の名勝、書院、茶席は國寶となつてゐます。をりから牡丹、つじは花の見頃で、當麻寺の風情は一年中で最もよい時期です。大津皇子をしのぶ上山を背に負ひ、「牡丹の名所石光寺を隣りにして、一日の行樂を兼ね、御家族連れで御出席下さるやう御待ち申し上げます。

・日時 五月十一日(日曜)午前十時半から

・會場 奈良縣 當麻寺・中之坊

(近鐵南大阪線「當麻寺」驛下車七〇〇米。大阪阿倍野橋から電車で、吉野(或は高田市)行準急に乗り四〇分、六〇円)

・詠草 近詠一首 四月末日までに本社宛ハガキで送付

521。

・會次第 1 歌會 午前十時半から正午まで

2 見學 午後一時から同三時まで

3 懇親會 午後三時から同五時まで

・會費 五十円(懇親會出席者は別に百五十円)

【備考】懇親會出席者は詠草送付と同時に申込みのこと。

大會委員 白珠大和支社同人



父

谷川新之輔

倒れたる梅の老木のほそほそと生命死なざることく父生く  
老の日をしづかに生きむ願ひさへつひに空しと嘆き給へり  
谷川の聲すみとほる眞夜どきを父は目覺めてくるしみ給ふ

忍野にて

林 鶴雄

地平線を太陽昇る一瞬に紅さす富士を寫生せむとす  
靴下重ね長靴を穿き懷爐入れウイスキーあふりつつ富士を寫生す  
室内にてタオル凍てたる朝にて窓外の樹々霧華を咲かす  
寫真にて見し樹氷をまのあたり見れど愕かず寒さを憎む  
卵割れば卵は凍り蜜柑食へば蜜柑も凍る寒き國なり

ひとを送る

杉野としゑ

濃みどりの木には紅の花あまた咲きもこぼれよひと送りいづ  
とほ光る雲の行方を見つめをり湧きて崩るの思ひとともに  
ひたひたと夜氣たたきぬるネオン燈を支へて遠しすぢの路線  
遠光る雲間を降りし陽のこぼれ濡れしワイシャツの端に止れる

幼

八波 和子

たまさかに風邪にこやれば父が放きし飯をうましと子は喜びぬ  
幼児が何かいつしんに書いてる紅いれよんでなにか書いてる  
化粧してとせがむ幼娘よきらに似し薄肌にも冬の陽がやはらかい  
かへらうよ幼児がいふ幼さへ暮れなづむ町はせつなかるらし

「夕鶴」を観る

西島 貞子

アナウンサーの風邪引聲も何がなし親しみてきく立賣の今朝

スマトラ

田中克巳

海渡りわが來し時に船追ひて飛びしま白き鳥はありしか  
なが泪濺ぎて賜びしモウリン花二十日へぬれば枯れにけるかも  
スマトラのメダンの市に汝を戀ふと人は知らねば物いひにけり  
女らの飲む弱き酒のみぬればホテルの廊に晝雨しぶく  
兵營に消燈喇叭の鳴るときし南十字は傾きにけり

急救車

得光 鶴代

夫、突然の發病にて一月二十三日重態に陥る  
深夜警察病院に入院す

夫の頬雪のときを振動のはげしさにいだく急救車のなか  
脈細く消えゆく夫をかい抱き病院までのながき一時間  
宮崎先生附添ひ給へば氣強くて急救車が鳴らすサイレンの音  
君が命われのいのちと一つにてあるとき必ず君死なざらむ  
すこやかに夫ある日には思はざりし涙いく條わが頬に引く  
健やかに夫ありてこそ平安の日日なりしかとおろかに過ぎ來

硫黄島

酒井 青峯

鬼哭啾々二萬の遺骨何を語る廢墟の島に七年は過ぐ  
四萬噸の爆彈を浴び四尺ばかり隆起せしとふかの硫黄島  
坑道にくぐまり命ある限り戦ひたりき八千の兵  
再軍備の議論はすでに空轉す民衆はただにパンに執せり  
八十億弗の賠償要求をきくさへや孫子の世にも戦ひは避けよ

冬 雜詠

井藤 勝太郎

五十年無爲に重ねし齡かとおつくづく云へばかなしかりけり

昨日ふりし霰庭隅になほ清く箒の先にころころまるぶ  
川風の寒き川面の船の上に夕されば火を燃して人生く  
人妻となりたる鶴は目か羽を衣に織りつつ衰へゆけり(夕鶴)  
つうはぬす鶴が一匹ぬしのみと與へうは舞台一ぱいに歎く  
又一つ何かを賣りてたまさかに來給ふ君に酒温めむ

聖 跡

藤原 優

但馬聖人池田草庵先生の遺芳に觸れむため二月中旬  
春雪の深きを履んで養父郡宿村青谿書院を訪ふ

山裾にひろがる家群危くも雪の野面に埋れむとす  
青谿の聖の跡は山陰の雪に埋れて音ひとつなし  
弟子共と米つきしとふから白は稟にまみれし壁に影おく  
土かまどすすけしままに今もあり聖も焚きしこの土かまど  
赤松の木の間にもそれとをろがむは雪に埋るるひじりのみ墓

夫と子

島下 八重子

子は既に纏らすなりて新春さびし一つの傘に夫と寄り行く  
白馬より歸り來し子が雪語る今宵は淨しわが家ぬちも  
雪室にわれは寝ねたし思ひ澄み濁りて凝りし血潮も解けむ  
雪室に金魚のごとくゆらゆらと灯かけ動かむ眞夜をおもへり  
おもほへす心澄み居り雪室に聖書を讀みし夢より醒めて  
山茶花の花びらに似てほの赤し冷たき水に濯ぎせる指

硫黄島

安田 佐和乃

底冷えのあした厨にわれは思ふ野ざらしを吹く島の海風  
硫黄島の最後つぶさに讀みゆきて涙ぞにじむ誰憎むなく  
日の光見む希望なき洞穴に戦ひやせて命終りし

憶ひ出の人らの面輪浮かぶとも年賀の筆は怠りぬたり  
すでにして祖國の位置も定まれば冬淡々と冷え暮り來つ  
朝いでて夕べに歸る倚るところあらぬ日月を飽くこともなく  
冬空の冴えよりひびくものありて置場に迷ふわれの心か  
南天の紅の實も鮮しくあしたの部屋に充ちくるひかり  
晝ひとりもの憂く居るを窓の外に何を愉しむ雀らの聲

雪

深澤 峽村

さんさんとわが身を埋めてふりきたる雪淨ければ還りくる夢  
遠い遠い國よりかへる夢ひとつさんさんとして雪にかけなす  
何も彼も忘れてしまつて雪の中に雪の私が風化してゆく  
汚れたる壁に對ひて生きる日日褪せし葩を大事にしまふ  
電壓の低き灯りに頼よせてかなしみのごとく新聞を讀む

めぐりあひ

宇佐美 喜三八

顔見合はせ思はず手をばとりあひぬ宵すぎで月照るバス停留場  
十餘年たより交さず春寒の月の光にその顔見たり  
友の息白々見ゆる酔ひざめの寒さに堪へて我はもの言ふ  
雪の夜にともに肉食べ酒飲みし船場の料亭今はあらじか  
年をへて白髪まじりの友を見つわれの前齒の缺けし見たりや

ゆくりなく

安田 章生

ゆくりなく汝ときたりて憩ひあり花なき園の枯芝のうへ  
菩提樹の梢をわたる秋の風はるかに過ぎて耳にとまらず  
青苔の色美しと木下かけ汝立ちどまる秋まひるなり  
心濁きて汝とゐる部屋の窓のそと風に鳴りつつ光る松の葉  
窓越しに松の梢の夕空がすみとほるとき言葉なくゐる



白珠社清規抄

白珠社清規抄 二十六日、那波西出町の加藤安恵...

受贈書紹介

歌舞伎手帖 戸板康二編 「歌舞伎とは何か」...

白珠社清規抄

入社 入社希望者は、氏名、年齢、職業...

投稿 毎月、短歌一人十首以内及び文章...

添削 一回十首限り、添削料百円。知名...

社中消息

みな調きゆき 吉田彌壽夫 安田青風 「日暮抄」...

歌集 晚夏 宮終二著

昭和二十三年五月から二十五年七月までの作...

新入社員

(氏名) (住所) (紹介者) 山岡 巧 貝塚 首藤...

合同歌集 波動 立川三郎編

九州から出てゐる綜合歌誌「波動」の會員合...

編集後記

○本誌は、「白木樺」の批評號として、いささかの特集をした。

○恒例の春季大會は、裏表紙廣告の通り、當麻寺で開くこととなつた。

○本誌がお手許へ届く頃には、春光漸やくうらかな候となつてゐるであらう。

定例歌會案内

毎月第二日曜日に大阪市警クラブ (市電馬場町下車、大阪中央放送局前丁) で正午開會、午後四時閉會。會費三十円。

白珠 第七卷 第四號

昭和二十七年三月二十日印刷 昭和二十七年四月一日發行 大阪府豊中市新免七五七

發行所 白珠社 振替大阪一〇三三九〇番



●創元社新刊 發賣中

安田 章生 著  
木俣 修著

### 現代短歌手帖

新三六判 二二〇頁  
定價一八〇円(送料二〇円)

#### 内容

- 一 短歌とはどういうものか
- 二 作歌の手引
- 三 現代短歌の展望
- 四 現代秀歌鑑賞
- 五 現代の歌人
- 六 主要な歌誌・どんな本を讀んだらよいか

歌人、短歌愛好家のハンドブックとして編まれ、清新な入門書を兼ねて、現代短歌に關する主要な知識を展望的に収めた書。

### 第四回 短歌夏季講座

#### 題目と講師

現代絵画の特質	京都大學教授 上野 照夫氏
國際情勢と經濟	産業經濟新聞 論說委員長 太刀掛 禮二氏
最近のフランス文學	大阪大學助教授 矢内原 伊作氏
ハイネの詩について	帝塚山、短大教授 田中 克己氏
短歌の傳統	大阪市立大學教授 谷 山 茂氏
短歌と生活	大阪大學教授 宇佐美 喜三八氏
作歌態度について	樟蔭女子大學教授 安田 章生氏

#### 申込のしきり

期 日 八月八日(金) 九日(土) 十日(日) 三日間(毎日、午後一時から同四時四十分まで)

會 場 大阪東區大手前町 大阪府立大手前高等學校

會 費 百 円(但、一日だけの受講は五十円)

申 込 住所、氏名明記の上、會費を添へ、なるべく八月三日迄に御申込のこと。

【備考】第三日・最終時限に會員の懇親歌會を開催の予定。

主催 白珠社

# 珠

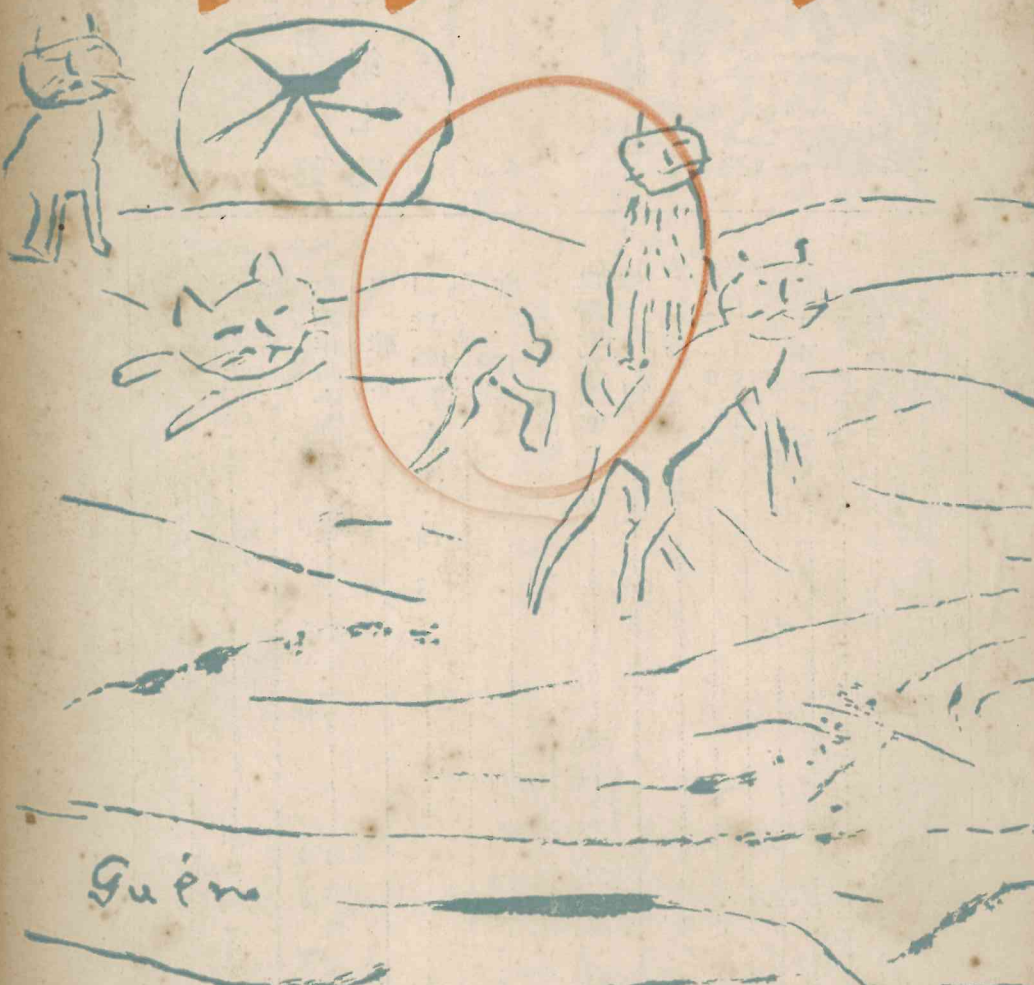
# 白

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一冊発行)  
昭和二十六年五月二十一日國政特別取扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十七年六月二十二日印刷 昭和二十七年七月一日發行

白珠 SHIRATAMA 第七卷 第七號 通卷 六十六號

卷号 七七 第七第

七月號





下宿より吾兒歸りきし夕餉には好むものをと厨にいそぐやむを得ず出で來し電車舗道には塵多くしていきづまりさう母の日に何か買つて上げようと吾兒たちのいふ聲を聞きをり午前中ほんの二時間もとち籠る事さへなくてベルは鳴りつぐ

不覺のわれ

小方 二郎

うらぶれし白衣のひとと豫備隊の對照がいまも割り切れずをり酔ひざめの水をもとめて幾刻か不覺のわれがいたはられぬる子を寝せて二十四時てふ静けさを愛しみつつ我の世界にひたる

池

八木 毅

狹井川を過ぎて山邊の道ゆけば池はひそかに水湛へおき水底の魚族の如く春の日も事なくありたし草萌え立てどやがて汝の上にも來らむ運命はさながら額田のおほきみの如く投げつけし石は水面に波紋残し沈みてゆけりわが影くづる峠路を三輪へ分かるる處近く籬へし罕に臥せる人ありき

穂の芽

田中 雨花

穂山の日暮れひそけし立ちならぶ穂に集まる暮れは次第に穂の芽を好みたりにし歌びとを戀ひつつ一日山畑を打つ穂の芽をくらはむ思ひもちつぎて今年も食はず季移らむか春霞む泥田眞青におごりぬむ野芹を思ひ一日臥れる馬酔木花ほのかに白く暮れ残る道べに君を置き去りにけり

靴

梶 紫峯

新調の靴を提げて孫まれ居て薄き双物に狙はるる豫感傷々しき靴の剣を勞はれば中の歌集も淺傷負ひ居り

スマトラ

田中 克己

夜となれば馬車をやとひて灯の明きまちに通ふがならひとなれりかく弱き軍屬もてる兵團を近衛師團と知るものもなしタマリンド茂る將校集會所キニューをひとときとどめ汝を戀ふ吾を戀ふと便りよせし汝のことも忘れてありと思ふ日のあり旅にゆく心とめ得ず來し高原秋草みだれ咲ける園あり長官の邸につどふスルタンら黄金の太刀を佩くをけふ見し

道成寺繪卷

安田 佐和乃

ひとすじに寄りゆく女心にてつひにしどけなし脛もあらはに清姫が蛇身となりて鐘を巻く圖繪うつくしく描かれておきめらめらともゆる情炎も淺ましと言ひ切り難き人間なれば蛇身塚おほ一本のぐみの幹手ふれて心静やかならず塚石はきたなく崩るをみなこのいきの命の極みのすがた

まぼろし

得光 鶴代

さまざまの苦しみを經てかく茂る大木の根にわが來て寄らむ秘めたるものも甦れり忽ちに寂しくなりてバラの香をかぐときめきて人待ちあたる思ひ出も時折りかへる夕べこの道よはひ遙かに過ぎたる今の心にも傷みし故に思ひ出消えずうつそみに顯つまぼろしも虹のごと消えねばならぬ夏の日の戀愚かなる碧梧桐の葉のざわめきは風いでて知るうつし世の如高き扉をめぐらす署長公舎の灯あかかかと點け夜をさびしむ

櫻吹雪

酒井 青峯

安らかに今朝はめざめぬくつきりと障子にうつる物干の影

紙幣束と見し錯覺は清貧の分に過ぎたる靴の罪か靴の創血はしたらず傷口を脇に抱きて家路を急ぐ琥珀色の酒を酌み居る人はよし花摘み厭かぬ童の居れば主座近く轉りありし一本の銚子ぶざまに壘を濡らす

筒飯野松原

奥 恒

あても無く來にけるものか筒飯の濱松の林に吾立ちつくす松原の中はわれ立つただ一人人の氣配の全く無き中落葉無き濱松原の砂の上に松露さがせし跡残りたり村祭り近くにあらし春霞む筒飯野の濱に大鼓聞え來黃に光る茶種の花が麥田走る電車の窓を過ぎし一瞬

空しき壁

野口 トミ子

温かき言葉も持たず雲低き空の下びを歸りつくわれ空しきむなしき歌おもひつつ眠りしが覺めし瞳に光がまぶし何故にかく空しき壁に突き當るほこり舞ひたつ街かどの春自殺記事のせめる紙面展げつつふてぶてとそこを讀む男ぬる他の批判はばからぬとき己が心に批判持つ人いくたりありや性質をいつまで汝は持ちあぐむどうにもならぬ嫌悪は捨てよ

放心

佐藤 昌子

ためらひて言ひ出でしことも簡単に誤解されゆく春夜の温さ濁りなきそのまなざしと思ふ故ひとの傍らに坐れずにある追憶をいたはる日にもいちめんの青葉の中の季節はながれ暮れの光ただよふ街の果にして連る山のむらさきのいる暮れゆけば紫に翳る山裾に灯ともして人らは心やさしくくれなゐに牡丹咲き足れる晝の苑放心もまた愁ひのごとし

春蘭けて苜のみどりはいろふかし光りて白き大淀の水入りつ陽に小波は燃ゆ櫻さくこの池のべにわれら佇つとき櫻吹雪しきれる下に妻と孫とわれの三人の影長々し雨靴を提げて迎へに來し孫がわれを呼びかく柵の外よりすつぽんを金魚餌にして飼ふといふ車中に語る聲もききたり

偽裝

乙 黒今朝三

弱きものが持つ偽裝にてとげとげと皮膚には針を植ゑてをるなり雄よりも雌のおこれる昆虫の世界を讀みて子は尋ねたり仔犬らに乳房ねぶらすときに閉つ眼と言へどやすらひてゐずはやすでに悲劇のなかに身を置きて溺るる如く泪を流す壺立ちて土より離るることもなし春淺ければ雑草の花今日ひと日寒の戻れる風の中さからひて立つ芽ぶける木木が

若葉

宇佐美 喜三八

柿若葉色暮れなづむたそがれに雨戸をしめてペンとらむとす花咲ける棟の木蔭そよ風におもかけ立ちて人のこひしき人の世にかくも寂しき時ありと岩に腰かけ河鹿さきさつ低空の爆音すぎて地の上に穂をもつ麥はただみどりなる大いなる機構がわれを動かすとき氣づきし時に疲れわきくる

佇む

安田 章生

闇のなか無茶苦茶に歩むときみはいふ光見えねばわれは佇む笹原に黄色くおどむ冬日ざしすぎゆく時間をわれは怖れる冬空は遠く凍りて朱に燃ゆ悉しめておるせ黒きカーテンきさらぎの朝の光に降る雪の音をいひつつ行きし山道歸りきて白き机に灯をともし妻と二人の夜はふけゆく



確稿「若草帖」をこの程上梓。尙、駒澤大學主催全國書道展、兵庫縣綜合美術展書道の部に於いて夫々最高賞を受く。  
 ○島本正齊 大和支社年刊歌集第一集「かくやま」を編集、この程上梓。  
 ○大井秀子 還曆記念歌集「しら萩」を山崎歌話會より刊行。  
 ○藤原 優 兵庫縣加東郡中東條村安國寺に「ほのほのとあけゆくものは幼なわが心なく見しふるさとの空」の歌碑建つ。なほ同寺には、すでに親父瓢村の句碑がある由。

定例推薦者民名

- 同人へ  
 鮎貝久仁子 酒原 令子 中田 昌二  
 同人へ  
 阿部 節子 飯尾 秀平 磯村嘉千雄  
 浦中浩太郎 佳田丘潤也 近藤 清子  
 杉本 壽子 鈴木 青露 田中 義郎  
 中西 恭子 林 貞子 藤原美代子  
 鮎貝智恵子 以倉 玄二 石岡喜代子  
 井上眞理子 小川美喜子 岡田喜久子  
 古古愁思堂 片岡 正年 門屋 福子  
 小林 幸子 工藤 美代 四方 綾  
 清水 富子 島本 成子 島本 正福  
 谷口美代子 富田 操 當麻 龍二  
 藤井 晴子 松村 泰子 皆川 福子  
 山崎 ひとみ 山田 光子 平尾 筒子  
 上野 容子 村上 妙子 北西アイ子  
 森田 正夢

白珠社清規抄

- 入社  
 ●入社希望者は、氏名、年齢、職業、歌歴を明記の上、社費三ヶ月以上を添へ申込みのこと。  
 同人社友  
 ●同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、同人、準同人は社友の中から力量充實した作家を推薦する。誌友は、雜誌購読のみで投稿は出来ない。(同人、準同人規定は別に定める。なほ特別社友の規定もある)  
 社費  
 ●一ヶ月社友六十円、誌友五十円。(療養者及び學生は中出により誌友費にて可)  
 ●社費切の時は直ちに送金の事。退社の時はその旨申し出る事。  
 ●送金の時は所屬欄を明記し、なるべく振替を利用のこと。  
 投稿  
 ●毎月、短歌一人十首以内及び文章等隨意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切る。  
 ●原稿は原稿用紙に書き、初めに所屬欄名及び氏名を明記のこと。  
 添削  
 ●一回十首限り、添削料百円。宛名明記切手貼附の返送用封筒同封の上、申込みのこと。

新入社友

- (氏名) (住所) (紹介者)  
 前田 弘子 大阪 吉澤 俊子  
 森脇 耕之助 兵庫 會谷 雅博  
 笠谷 はる 同 同  
 室山 勝己 同 同  
 織野 絹江 姫路 安田 勉  
 佐々木 風一 三重 同

白珠社歌次・新刊書

大井秀子著 一七〇頁・二〇〇円  
 歌集「しら萩」 山崎歌話會發行  
 序歌・吉植庄亮、序文・安田青風、裝幀・大矢峻嶺、美しい還曆記念の集。  
 島本正福編 四〇頁・七〇円  
 かくやま第一集 白珠大和支社發行  
 白珠大和支社同人十名の自選歌二〇四首を収む。瀟洒なB6小型本。

發行維持費寄附

- ▲二〇口 島本 正齊氏 ▲一〇口 大和支社  
 ▲六口 山崎秀二郎氏 ▲四口 吉田彌壽夫氏

編集後記

○本號から少し増頁したい豫定であったが、いろいろ事情で編集をとり急いだため、散文原稿等がまにあはず、従来通り四〇頁にまとめることにした。  
 ○増頁をすれば、歌の選もいくらか寛くできると思つてゐるが、春季大會で大方の希望では、社内評にならなく、従来通りとつて貰ひたいといふとであつた。十分といふわけにはもとよりいれないが、今後は社内評にも従来よりいくらか紙面をさくようにしたいと思つてゐる。白珠雜誌等の散文原稿も取捨は御一任の上、どしどしお送り願ひたい。

○受贈書も、従来は紙面に餘裕がないため、簡単な紹介にとどめてゐたが、今後は出来る限り書評の形で紹介したいと思つてゐる。  
 ○定例の推薦を、別に掲げた如くおこなつた。今回推薦となつた方も次回に廻つた方も、一層御精進下さるやうお願ひ申し上げます。新同人の鮎貝久仁子氏はよき主婦としての生活の傍ら、阪神支社の世話役としても

御願ひ二項

(一) 歌稿を認められる場合は、左の諸點につき特に御注意の上、お認め下さい。  
 イ、一首を二十七字以内に書くこと。  
 ロ、初めに所屬欄名と氏名を明記すること。  
 ハ、なるべく楷書で書くこと。(草書や變体仮名や、鉛筆書は困ります。)  
 ニ、なるべく原稿用紙を用ひ、欄外に書いたり歌の上に○や番號をつけたりしないこと。  
 ホ、二枚以上の時は、紙をひろげたまま(二つに折らない)右肩を綴じること。  
 ヘ、紙の裏面は使用しないこと。  
 未だに薬書に書かれる人、鉛筆書き、仮名書きで三十字も三十一字も伸びてゐるもの等あつて一々書き改めてゐます。何うしても二十七字に収まらない歌は仕方ありませんが、漢字を挿んで収まるものは一寸工夫して頂きたい。  
 綴ぢてないために、ばらばらになつて他人の作と紛れることもあり、裏面に書いてあるため印刷の際に見落すやうなことも屢々ありますから、ぜひ御注意下さい。

(二) それから御送金の際は、必ず同時にその内譯を書き添へて下さい。御通知と送金の時日がずれるとよく混亂が起ります。振替の時は必ず通信欄を利用して頂きたい。又雜誌發送の封皮は少し早目に書きまますので、御送金と行違ひに社費切の捺印をしたまま、雜誌の届くやうな場合もございませぬが御諒恕下さい。

七月歌會案内

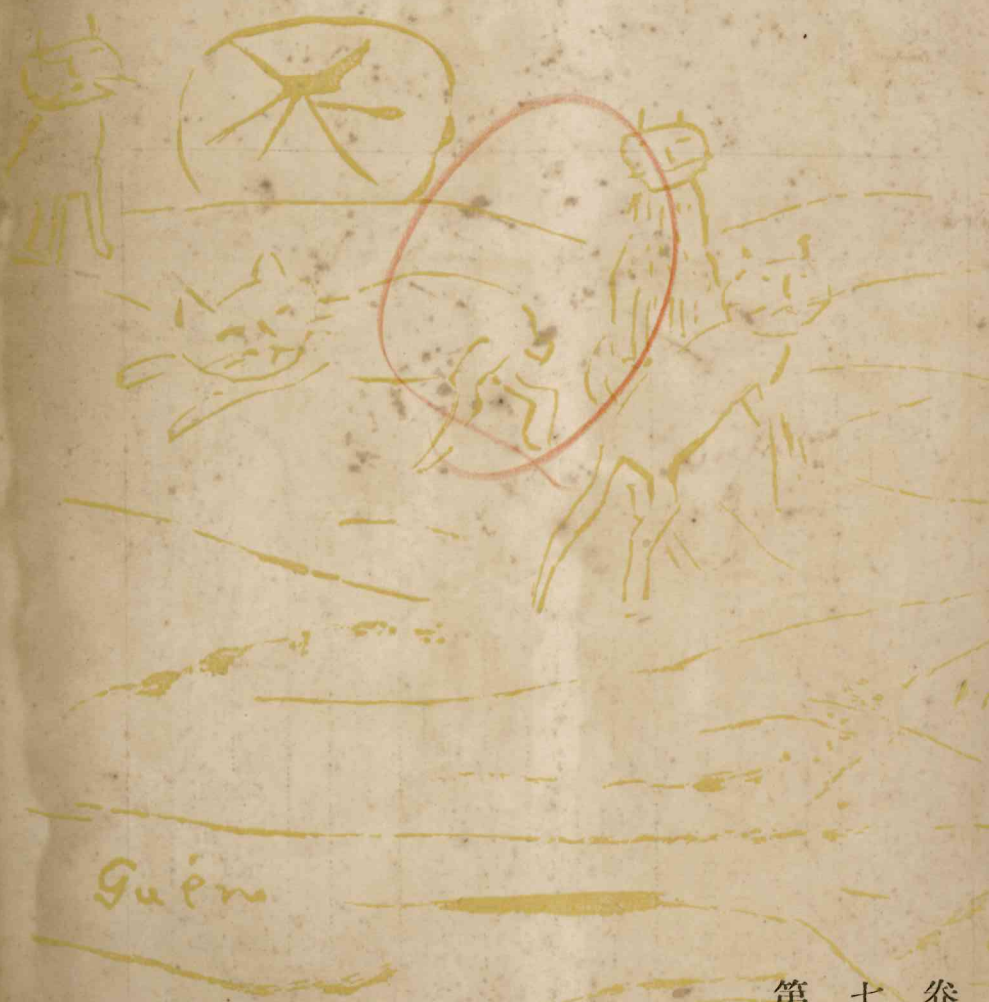
●七月十三日 大阪府立大手前高校(市電大手前下車、府廳北隣)正午開會、午後四時閉會。會費三十円。  
 ●歌會詠草は、近詠一首を七月三日までに薬書に歌會詠草と明記して左記宛送附のこと。  
 大阪 酒井 青峯

白珠 第七卷 第七號  
 定價 五十円

昭和二十七年六月二十日印刷  
 昭和二十七年七月一日發行  
 大阪府豊中市新免七五七  
 編輯者 安田 喜一郎  
 發行所 白珠社  
 印刷者 篠田 錠次  
 大阪府豊中市高麗橋五丁目三五  
 印刷所 株式會社萬年社  
 大阪府豊中市局區内新免七五七  
 發行所 白珠社  
 振替大阪一〇三三九〇番



# 白珠



昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可、毎月一回一日發行  
 昭和二十六年五月二十一日國幣特別授与承認雜誌第九七六號  
 昭和二十七年九月二十二日印刷、昭和二十七年十月一日發行

白珠 SHIRATANIA 第七卷第十號 通卷六十九號

卷號 七十 第七第

十月號

## ★ 歌詠要項

- 一、詠進 短歌一人一首
- 二、詠題 自由（但詠に限る）
- 三、用紙 はがき
- 四、書式 堅詠頁（歌の次に住所氏名明記のこと）
- 五、締切 十月十日
- 六、献詠奉告式 十一月三日
- 七、宛先 明治記念綜合歌會
- 八、表彰 評選者十名（表彰狀、記念品、選者白筆色紙）
- 九、佳作者二十名（現代歌人自筆短冊）

## 明治天皇御生誕百年祭奉祝短歌會

### ★ 歌會要項

- 一、日時 十二月二日（日）午後一時より
- 二、場所 明治神宮北休憩所（寶物殿傍）
- 三、選者 鹿兒島壽藏 五島美代子  
長谷川銀作 福田 榮一
- 四、講師 佐々木信綱 金田一京助
- 五、次第 選歌發表 選評 講演 表彰 懇談
- 六、會費 不要

## 明治記念綜合歌會

電話（37）〇一六〇一七

池田鶴編博士評「著者は歌を作るというところを人間構造の根元において見ている。推敲とか添削とかの事實は、多くの例を示して、じゅんじゅんと説かれているが、著者はそれらを單なる技巧とは見ず、作品形成とともに成長する人間像の發展として見ている。ほのぼのとした文体の美しさは、清純な知性の輝きを喪わない。知性と抒情との現代的抱擁を目標とする著者は、その遠い路を旅する人たちのために、一つ、また一つ、更にまた一つといふふうには、身をもって標識をうちたてている。近ごろ讀んだ本の中で、ことに心のなごむ、楽しくかつ有益な本の一つであった。」

—「朝日新聞」（大阪・八月二〇日）所載  
 書評の一節—

## 創元社刊

木俣 修 新三六版 二二〇頁 美本  
 安田章生 著 定價一八〇円（送料二〇円）

## 現代短歌手帖

・日時 十月十二日（日）午前十時

・會場 西宮如意寺

阪神電車西宮驛下車、北出口へ出て最初の辻を東へ一丁突き當りの寺。大阪梅田から急行で五分、四〇分。

・詠草

前號御案内の通り、秀歌投票は十月三日までに、神戸市東灘區御影町濱中三八一 吉井憲宛に願ひます。

## 白珠秋季大會

・次第 (1) 歌會 午前十時—午後三時

(2) 懇親會 午後三時—同 五時

・會費 七十円（懇親會費は別に百五十円）  
 當日御持参下さい。

【備考】

イ、懇親會出席希望者は豫め申込み下さい。  
 ロ、當日は津川彌知世氏により大會状況の録音と8ミリ攝影が行はれる等。

委員 白珠阪神支社同人

白珠 SHIRATANIA 第七卷第十號 定價 五十円



東大阪歌會

昨年一月、白珠新年歌會の席で、中村秀哉、榎紫峰の兩氏から東大阪歌會設立の相談をうけたので、その後三宅登美子氏と私を加へた四人が發起人となつて急速に話が進み、同年三月には早くも第一回の研究會を兼ねて會運籌の打合せをする運びになつたのである。その席上で、「東大阪短歌會」といふ名稱が決定した。

爾來、大手前高等學校を定例會場として、毎月第四日曜日に歌會を開催してゐる。會員數は名簿の上では三十名を越えてゐるが、歌會出席者は、凡そ十名前後を常といふことになつて「はりえんじゆ」といふ題名まで決定したのであるが、同年五月の奈良における白珠春季大會の席で、阪南歌會の機調紙である「黎明」を阪南、阪神、北攝、東大阪四歌會の合同機調紙とすることに話がきまつたので、「はりえんじゆ」は遂に日の目をみないままに流産してしまつた。

研究會の方針は、お座なりの批評や賞め合ひを排して嚴正な研究態度を持ちあふことに努め、單にお互ひの作品を批評しあふだけでなく、歌壇的視野を深めてゆかうといふことになり、二回目の歌會には「現代女人短歌の傾向」について酷評しあつたりした。この批評態度はお互ひに相當辛辣ではあるが、しかしどつづくばらんで氣持がよく、殊に三宅氏などは極めて鄭重に酷評したあとで、

「アラ御免なさい、ホホホ」とやられるのだから一同爆笑。まことに愉快である。この傾向は、奈良の吉田彌壽夫氏が参加するに及んで一層活潑となり、歌會毎に大論争が展開されて、おとなしい竹木田愛子氏などは、「短歌といふものがわからなくなつてしまつた」と悲鳴をあげる有様であつた。主な論争の對象は、「象徴派と生活派」「プロレタリア短歌について」「知的抒情の方法論の解釋について」であつた。

出席者について御紹介しよう。中村秀哉氏は大阪府職業安定課の若き事務官であり、本社歌會においては常に高點歌に選ばれたといふ有望な歌人であるが、最近はどうしてかスランプである。吉田彌壽夫氏は京大國文出身の詩人であり、大手前高校に勤務、實作においても、歌論においても白珠の將來を擔ふ俊秀の一人である。三宅登美子氏は運動具店に勤務の若き職業婦人である。氏の短歌は、その生活意識を基盤として、現實との眞摯な対決の中から生まれてゐるのである。榎紫峰氏はすでにお孫さんもあり、のんびりと老後を樂らしてをられる幸福な方である。氏の愛用のカメラは白珠大會の折の記念撮影にいつも役立つのである。竹木田愛子氏は若きデザイナーであるが現在は家事の手廻りをしてをられる。翻かて華麗な中にもキラリと光るものを醸してをられる。

井手早月氏は大阪造船局に勤めてをられ、長い作歌經歷を持つてをられる。隅田淑子氏は奈良女高師文科出身、高津中學校の國語科を擔當してをられる。近藤嘉宏氏は目下病氣療養中で歌會には出席されないが、妹さんの近藤喜久子氏に作品を

夏季講座の記

時 八月八日(十日(三日間))  
處 府立大手前高校圖書部

杉野としゑ

第四回 短歌文學  
第一日 午後一時、吉田彌壽夫氏の司會で先づ安田青風先生の開會の辭に蓋をあける。生徒用の窮屈な椅子に皆を偲びつゝ熱心に耳を傾ける人白名にとどかうといふところ。

第一講 「作歌態度について」安田章生先生。「人間それぞれに生き方ある如く、作歌態度もいろいろとある。一度きりの人生を自らの力により價値あらしめんとするところに文學は成り立つ。ところで人生を價値あらしめんとして絶えず困いてゐる人間が幸福であるのは難しい。そこを這り越した時にこそ心の豊かさが生れる。科學地位の現今、知がその反面の情と融合することを我々は詩を通して計り、現代の不幸を救ふべきだ。」と力強く説かれて、我々に「知的抒情」を再認識させられた。

第二講 「ハイネの詩について」田中克己氏。「彼は愛される詩人である。現代最も多く譯まれる詩人の一人である。又愛する詩人であり、若い頃から次々戀愛して、それは生涯續いた。然し又愛されるぬ人もあつた。彼は戀する多くの女性からも、大切な出版屋からも、親族からさへも愛されなかつた。」と整然と説かれ、果ては煙草片手

の和やかさの中にロマンの意識の醒明となる。

第三講 「現代フランス文學」矢内原伊作氏。その代表的文學者カミュの文學を取り上げ、「彼は反抗と愛、遂には權力に對する反抗に一貫してゐた。」ニヒリズムは消極ではなくてむしろ人生をありのままに豊かに生きんとするフアッシュンの現はれであり、だからこそ生の意味を認めないのだ。「二十世紀は一般に形而上學的宗教的時代であるが、佛文學まはしかりである。又、永遠的な人間の本質が問題でありながら、政治的社會的な時代の關心が表面に出でゐる點、即ち「參加的」の文學の多い點もその一特色である。」とのべられ、ダダイズム・シュウル・リアリズムの説明に及ばれて大いに啓蒙された。なほ三日間、講演終了後約一時間にわたり希望者に同人飯森米藏氏のフランス語の指導が行はれる。

第二日 第四講「短歌と生活」宇佐美喜三八氏短歌の起源と一般にいふ歌をあげられ、「それらを通して我々は古代人の生活と短歌との緊りの強さを知る。萬葉には符算從駕が、古今には僧侶が夫々多く、そこには當時代に専門的職人以外の一般の歌とみか如何に多數であつたかが語られてゐる。」と説かれて現代人に反省を興へられるところ大さかつた。

第五講「短歌の傳統」谷山茂氏。「なかくてよいやうでありながら無ければ困るのが傳統だ。長い我々の短歌の傳統の中、古今集のそれは特に後世を長くリードした。ミソクソにけなした明治の子規の語にすらそれは讀みとれる。古今集は現代肯定の文學である。それは盲従と意を異にするが

托して批評を求められるといふ熱心さで、一同敬服してゐる次第である。一日も早き御平癒をお祈りする。井上高理子氏、佐田博道氏、上野孝子氏は會社に勤務の若き職業婦人、極めて熱心に殆んど皆出席である。白珠集の常連で、將來を期待できる一人である。皆川彌子氏は大手前高校定時制の養護教諭として勤務されてゐるが、吉田氏の指導で最近短歌を始められたばかりなのに、今では白珠集の常連である。極めて多作で將來有望である。もう一人白珠集の常連に、同じく大手前高校定時制の生徒、大村加代子氏がある。東大阪歌會での最年少者でいつも隅の方に小さく坐つてはゐるが、始めてから間もないのに、めきめき上達してゐる。

その他、ここに紹介しない會員の中にも、多くの有望な人々があると思ふが、紙面の都合もあるので割愛する。申し遅れたが最後に私の自己紹介である。吉田氏、皆川氏、大村氏などと共に大手前高校に關係をもつ一人であり、一介の國語教員としてゐるが残念ながら未だ受賞したことはない。續の方は完全にシュウルリアリズムであるが短歌の方は依然としてリアリズムを尊守してゐる。ところで、東大阪の歌會は遺憾ながら次第に低調に向ひつつあるが、いづれ近いうちに捲土重來を期して立ち上つるつもりであるので、會員諸氏は勿論のこと、廣く白珠社内の方々の御鞭撻御激勵をお願ひする次第である。

濱口忍翁

結果から見ると従ふことを避けれなかつた。」と巻頭の「年のうちに……」の歌を例に、内にこもる時代への不満と、それをのがれんとしてのエスプリを指摘せられ、古今集のため大いに氣をはかれた。

第六講「現代繪畫について」上野照天氏。モダニアートはアブストラクトとシュウルリアリズムに大別され、前者はキュビズムから、後者はフォービズムから來てゐる。一つの立体を例に、一々の描き方を筆致巧みに示して多大の興を起させられ、續いて特にシュウル・リアリズムに關して「之は狂氣や夢の状態までも藝術の世界に入れた。シュウルはダダにより破壊されたものを自由な組み立てた。否定された所において現實を取り上げる所に意味がある。」と説き、最後にオートマテイク・ライティングによる自作の詩を紹介して一同を樂しませて下さつた。

第七講「國際情勢と經濟」太刀掛禮二氏。「日本は本當の意味の獨立をせねばならぬ移民にのみ力を注げぬ現世界情勢である。貿易が大切だ。とにかくやうに不安な時は、皆が必死になつて倍働かねばならぬ。」と難しい時事を巧みに解説して下さり、時代に對する自覺を新たにさせられた。

歌會、七回の三日にわたる講演も夫々有意義にすぎ、最後の親睦歌會に移る。例の如く投票の後高點歌順に講評。高點歌作者三名には青風先生御筆の色彩の授賞があり、五時頃一同散會。なほも三々五々盡きぬ談合に夏の夕の日の長さももの足りぬ顔。かくて我々の白珠社はここに一つの前



進を見せた感あり、一同新しい作歌意欲に燃えつゝ漸次闊達につく。當日の高點歌次の通り。  
 煤煙が動く籬の果にして夕べ短き虹立ちにけり(7點)  
 佐藤 乙生  
 ともしたる追憶の灯はあたたくくしほし消ゆるな手もて闇はむ(7點)  
 船貝久仁子  
 草の葉にこぼれず光る水玉よせいいつばいの抵抗にゐる(5點)  
 飯森 米藏

### 七月歌會報

本社例會 十三日、大手前高校で開く。出席者三十二名。  
 長くなが歩みつづけてふりむけば還るところのなき思ひする(11點) 清原 令子  
 京都支社例會 五日、佐藤美知子宅で開く。中井和子ら六名出席。  
 ストとデモの抵抗を一つの慰めに破防法成立の新聞を執る 荒井俊一郎  
 大和支社例會 六日、島本正齊宅で開く。入江春行等五名出席。  
 職人だどうせ俺はと汗臭きスボンに足をぐいと突込む 當麻 龍二  
 世界長歌會例會 十六日、世界長ゴム本社第一會議室で開く。浦中浩太郎等十一名出席。  
 六年ぶりに岐阜提灯をともしをり接收されてみし彼の家 夏至 雅博  
 阪神支社例會 十九日、今津の船員久貝子宅で開く。吉井薫、今村惠子等二十名出席。  
 茜色ひとときの夏雲に潰えし思ひしましあかるむ 西島 貞子

### 白珠社清規抄

入社 入社希望者は、氏名、年齢、職業、歌歴を明記の上、社費三ヶ月以上を添へ申込みのこと。  
 同人 同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、同人、準同人は社友の中から力量充實した作家を推薦する。誌友は、雜誌購読のみで投稿は出来ない。(同人、準同人規定は別に定める。なほ特別社友の規定もある)  
 社費 一ヶ月社友六十円、誌友五十円。(中出により療養者及び學生は誌友並同一家族は一人を除き他は半額)  
 社費切の時は直ちに送金の事。退社金の時は所屬欄を明記し、なるべく振替を利用のこと。  
 投稿 毎月、短歌一八十首以内及び文章等任意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切る。  
 原稿は原稿用紙に書き、初めに所屬欄名及び氏名を明記のこと。  
 添削 一回十首限り、添削料百円。宛名明記の手貼附の返送用封筒同封の上、申込みのこと。

### 編集後記

○夏季講座は、本號掲載の記事の通り、盛會であった。御盡力賜はった方、御努力賜はった方に誌上を以て厚く御禮申し上げる。  
 ○秋季大會は、裏表廣告の通りに開催する。阪神間は社友の最も多くをられるところである。同地方の方で従来歌會に出席されなかつた方もこの機会に是非御出席頂きたく、特に希望したい。勿論、他の地方の方も都合つく限り奮つて御出席ありたい。多くの白珠社友が會する當日を楽しみに待ちたい。  
 ○本號は歌集「しら萩」讀後感想を小特集した。同集は、送料共二〇〇円、郵部があるので、御希望の向きは御申し込みありたい。  
 ○入江春行君の寛書誌は一應本號で完結した。同君の長い間の苦心を多としたい。  
 ○各地歌會の模様を傳へ社中の多くの方々からおもしろい讀み物として歓迎されてきた白珠歌會巡りも本號で一應終ることとする。なほ今後新しい歌會が興れば、簡便として掲

### 社中消息

○安田青風 「火花と平和」を「大阪日々新聞」(七月廿五日)に發表。八月六日、大阪築工三國工場歌會で歌話及び選評。  
 ○安田章生 日本歌人クラブ幹事(關西地方)となる。七月下旬、上高地に遊ぶ。  
 ○酒井青峯 「竹槍」六首を「あをぞら」八月號に發表。尚、同號より「あをぞら」歌壇選者となる。七月十九日、島田桐子短歌會の講師となる。七月十九日、島田桐子短歌會の講師となる。

### 北羅歌會例會

二十日、得光鶴代宅で開く。阿部 漂二、田中雨花等十四名出席。  
 さらし何かをしたい見つけた、人の後より首出している 松井 正子  
 太子支社例會 二十六日、姫路市網干區高田の前田孝宅で開く。西村久雄等六名出席。  
 田ありと意識しながら見送りぬ小さき理性に抗ふすべしなく 安田 勉  
 廣野支社例會 二十六日、會谷雅行宅で開く。勝井保等五名出席。  
 いちめん月に月見草喚く川岸に野良に汚れし手を洗ひをり 西垣内靜世  
 甲子園歌會例會 二十七日、甲子園口の岩田文子宅で開く。高木伸子、國分文野等十一名出席。  
 ビアノ音もれくる窓にからみたる鶯の青葉に殘る夕光 逸見 文子

### 阪南歌會例會

二十七日、雷塚山の酒井青峯宅で開く。浦林繁樹、佐藤義信等十九名出席。  
 新しき話とてなくやすらへば憂ほてりし部屋に月射す 藤原美代子

### 白珠は毎月、二十日頃に次月號を

發送してあるが、都合によつて少し遅れる月もある。月末を過ぎてても到着しない時は一應御照會ありたいがそれまではお待ち下さるやうお願い申し上げます。  
 ○現在、特別同人社友の方は、投稿歌數に制限を設けてゐない。それらの方は、歌稿の所屬欄名のところに「特別」と御記載ありたい。  
 ○社費切の通知は包裝紙の表に書いてあるから、各自御注意ありたい。當方で一々御通知するやうなことはたいへんな手數で實行し難い現状であるから、十分各自で御注意頂きたいのである。

○以上、本號では主として事務的なことばかり申し上げたが、季節もいよいよ上爽やかな秋に入ることであり社中の方々の一層の御精進をお祈りしたい。最近、出詠者の數もいよいよ増加し、特に準同人、社友の欄に大きなブールがでさ上りつつあることは心強いことである。皆麗ひ合つて、新風を更に開拓して行きたいものである。(童生)

### て歌話選評

○安田佐和乃 「法要」五首を「朝日新聞」(八月二十日)に發表。  
 ○十原時雨 「黒い朝」五首を「歌壇新報」(八月廿五日)に、「孤鏡」五首を「神戸新聞」(八月廿五日)に發表。  
 ○三水壽子 「若き命」五首を「朝日新聞」(大阪・八月八日)に發表。  
 ○林 鶴雄 第三回研水會展(大阪美術會)に「鳥羽風景」四點を出品。尚、貞子夫人、紗衣令嬢も共に同展に出品。  
 ○大瀧雅明 結婚、佐藤と改姓。  
 ○谷口米子 結婚、森本和佐子と改名。  
 ○上島俊彦 寡父逝去、哀悼。  
 ○首藤 忠 長女逝去、哀悼。

### 新人社友

複 作子 (住所)	豊中	天保喜代子 (紹介者)
明智 俱子	尼崎	
松島 節子	伊丹	佐藤 昌子
岩城 實藏	三重	佐々木 風生
飯田 裕子	大阪	本田 正夫
田中 禮子	同	
崎山 裕子	同	安田 青風
武田 イクノ	同	小泉 芳吉
大下 東郎	同	
仁瓶 誠五	大阪	仁瓶 早苗
太田 理	芦屋	佐藤 昌子
堀川 ふみ子	大阪	

・十月五日(日)午後零時半から  
 兵庫縣山崎町本多館で  
 姫路駅前からバスで一時間。神戸市からの直通バスもある。  
 「しら萩」出版記念歌會  
 (1) 諸家「しら萩」感想、  
 (2) 歌會  
 ・會費 五〇円  
 主催 白珠山崎支社

白珠 第七卷 第十號  
 定價 五十円  
 昭和二十七年九月二十日印刷  
 昭和二十七年十月一日發行  
 大阪府豊中市新免七五七  
 編輯兼 安田 喜一郎  
 發行所 大阪府東區高麗橋五丁目三五  
 印刷者 篠田 錠次  
 大阪府東區高麗橋五丁目三五  
 印刷所 株式會社 萬年社  
 大阪府豊中市局區内新免七五七  
 發行所 白珠社  
 振替 大阪一〇三三九〇番



創元社新刊（白珠社取次）

安田章生歌集 白珠叢書第三篇

表 情

三六判 一五〇頁 極上美本  
定價 二五〇円（送料二五円）

一九四八年一月より本年八月までの作中から二七七首を選んで本集を編みました。前歌集「心象」以後の作品に當るわけです。未発表の作も若干あります。

装幀、紙質等は、たいへん美しい本となるはずで、その點、作者自身もたのしみにしてをります。

一本をお買ひ求め賜はりますならば、この上もないよるこびであります。（著者識）

新刊發賣中（白珠社取次）

大阪大學 教授 宇佐美喜三八著

和歌史に關する研究

A5判九ボ一八行組・三五六頁  
定價 三五〇円（送料四〇円）

和歌史に關する研究を主にして、收録せる論文十五篇。いづれも前人未考の問題を取り上げ、健實なる實證的方法により、新事實を究明し、創見を樹立せるもの。敢へて好學の士の清鑑を庶幾ふ。

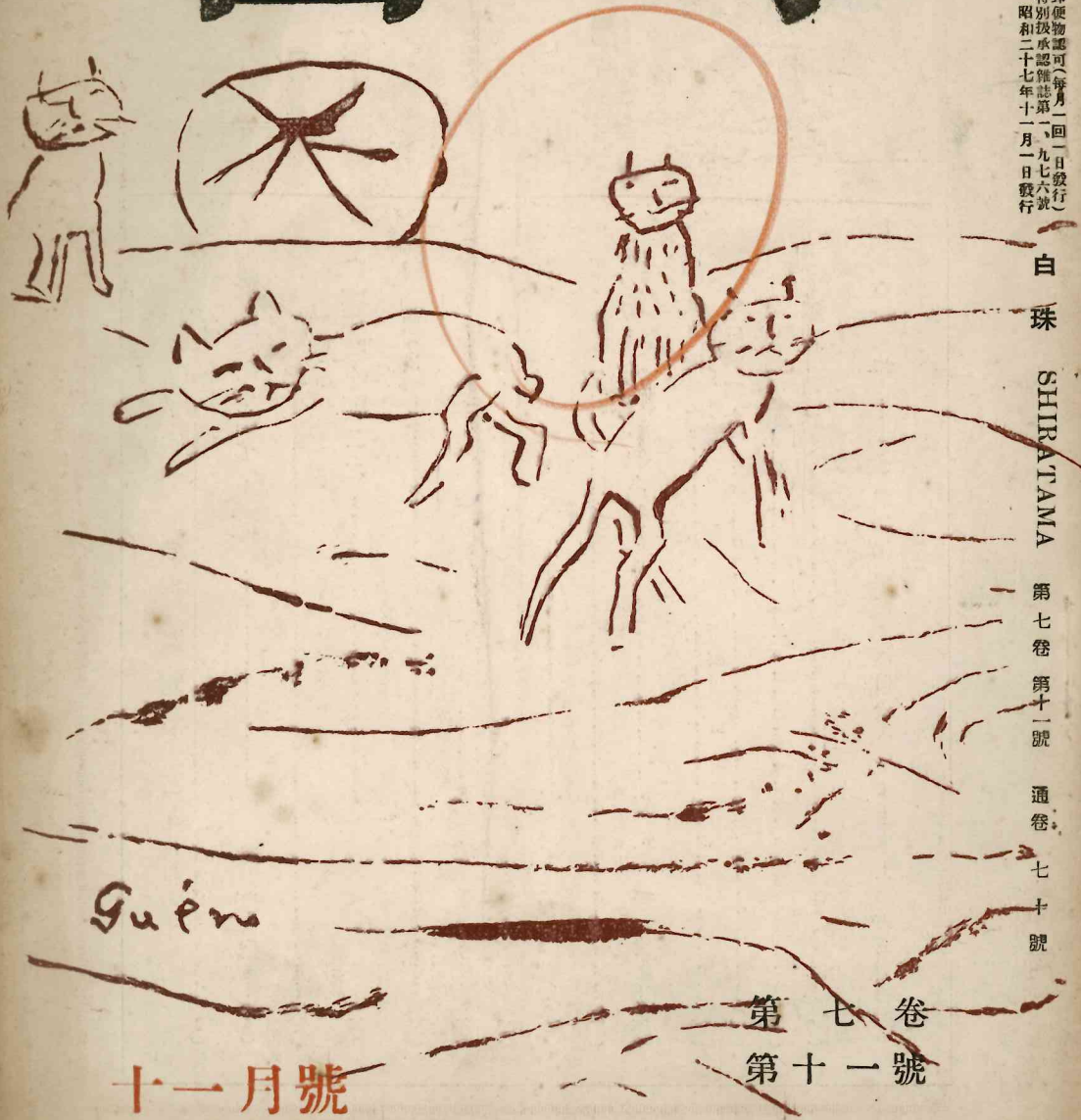
大阪市南區順慶町四丁目六一

發行所 若竹出版株式會社

振替大阪一一五〇八三番

白 珠

白



十一月號

第七卷 第十一號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和二十六年五月二十一日國鐵特別扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十七年十月二十日印刷 昭和二十七年十一月一日發行

白 珠

SHIRATANNA

第七卷 第十一號

通卷 七十號

白 珠 第七卷 第十一號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和二十六年五月二十一日國鐵特別扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十七年十月二十日印刷 昭和二十七年十一月一日發行

白 珠

SHIRATANNA

第七卷 第十一號

定價 五十円

昭和二十七年十月號



奥の院の歸り路を細く色づきて水引草はとこどこに

千曲の歌

小野三沙子

夜深み蚊やる手かげの月さえて水音聞ゆ千曲の草笛  
青葉かげ小諸城趾の石垣にきえてゆきけりひぐらしの聲

千成瓢單

大井秀子

千成り瓢單ゆらゆら柵にゆれてゐる夕べとなれば虫かごもつり  
柵下に今もうつけて吾が立てば十余りの瓢單が見下してゐる  
瓢單棚の上をはらかに飛行機がうなりてすぎぬあ瓢單よ  
燦々と照りつくる陽は眞晝にて鬼百合の花いよようつくし

葉煙草乾燥

永瀬翠明

乾燥場の火を守りてぞ眞夜ふけぬひとり庭に蟻をつぶしつ  
執拗に我にまつはる一匹の藪蚊をころす憎悪のこころ  
きびしがるこの世に生きて理財力なきを顧み大き恥とす  
つきつめて否定も出来ず肯定もならぬあやふやな私の生感

山椒魚

梶紫峯

美作の國の奥處の川に棲む山椒魚を友と見に来し  
一メートル參百年の齡經し水底に棲むなまくらな魚  
美作の國の境の村宿に夕餉の肴この魚ならし  
梅雨晴れを待ちて賣出す綿浴衣未だ降りつづく七月の雨

あなたは

藤澤昭子

似合はない言動などと批評するあなたは本當の私を知らない  
私を知り盡したやうな顔をしてあなたは何を見たと言へるの

救はれたくない自虐心抱きゐる生活の巾がみ續くいつまで  
螢光燈の卓上ランプ買はむなどと母と語らふ一夜ありけり

野の花

西島貞子

運命に素直なる歌見てしより心安らぎ書店を出でぬ  
札幌の農大の庭のうまごやし厚き繁りに君憩ひし  
夫在りし日に續ぎ張りし壁の紙この室に在りて幸なりし  
野の花の小菊を水に濯ぎ來て今日み佛の三年に供ふ

世の中

山本信實

何ものか折れる音をば知りつつも押さねばならぬ立場を持ちぬ  
食ふ爲に叡智を潜め意氣地なく強きに挫け草などむしる  
着飾りて銀座通りを流し行くただそれのみの女性もありぬ

航空切手

高井祥平

二十五仙の航空切手の色青くけふアメリカの着きし繪葉書  
帯虫のいつしか寄りし青柿は朱色となりぬやがて墜つべし  
大輪に咲き誇りたる日も在りしひまはり枯れて風にゆらげり  
みどり葉に黄鹿の子まじる雁來紅を美しといひて瓶に挿したり

清水山清行

藤原優

里一つ底に沈めて事もなげにダムの水の面は唯さざ波す  
山と野のけじめもなく夏草は猪垣を越えて畑にひろがる  
熊笹の盛り上ること繁るあたり風の渡るに音はさやげる  
菩提樹のはだらの木肌女蟬一つ宿して黙深く居り

石

黒田憲一郎

夜秘かに帳られし紙に書かれたる真相といふものも疑ふ  
甘ゆれば打つこともなき人間と知りぬて猶は膝にのぼれる  
いづれかを味方の如く言ふ聲々信ぜねば弱し吾らの立場  
眞實を歪め傳ふるも力にて吾は哀しきまばたきをする  
人間のなせるあやまち彼もして戀ひき娶りき悔い始まらむ  
夫婦といふ定めゆゑに安んじて眠るひとつの蚊帳の中に

眞實

乙黒今朝三

盂蘭盆もすぎし朝夕の風のおとしづかにふかし安からねども  
裸婦像が保つ光りもしづかにて秋の美術展はじまれる記事  
愛情をより處となして妻子等の足かせの如く病めるいく年  
病む吾を憫れむよりもこの妻をあはれと思ふ夕べおろかに  
貧しき者は麥を喰へと云ふ愚かなる政治を嘆きまた憤る

孤高

宇佐美喜三八

おしろいの日暮れに咲ける花赤く聯想ありて心ゆらめく  
屈辱に耐へて生くると侮りて孤高のこころ彼知るらむや  
腹切りて親の情説く舞台の上虚構のせりふも人泣かしむる  
人の生歴史流れて浮かび消え千年杉はただ亭々と  
吉祥天女のモデルとなりけむ乙女子も老いて死に行き幾星霜ぞ

秋

安田佐和乃

吹く風もかそけき眞晝街路の上とんぼ光りとぶ秋の氣配に  
盆踊こよひもはずむ歌聲のリズム流れ來風に蒸されて

秋

得光鶴代

かなしみにぬるる瞳に重なりてしらくぼやけぬ庭先のばら  
歸り來て獨りなる家に夕はやく灯ともし何を讀まむとすらむ  
いでゆきし時のままにて一切のパン乾からびて水屋にのこる  
住居かへて今年きき始む秋虫のこゑは焼あとの雜草のなか  
眞夏日に鶯のこゑ鳴かせぬる家の軒場のすずしきへちま

老兵のうたへる

田中克己

昭和二十年三月十八日召集  
父祖のまちごとく焚きこの腕に銃と剣とをとりしめし火や  
妻子おきくぐりし門の嚴しさに死ぬを思ひぬたる兵われ  
海峽をわたりて着きし釜山港硫黄島なる玉砕を告ぐ  
北京城はるかに見やり南下する軍用列車われを載せたり  
秋風嶺越え來しこともほとほとに忘れて我は兵としなりぬ  
故郷をいでて年へし古兵らのすさべる見るが日課となりぬ

秋

安田章生

一千萬年たてば地球も滅ぶとぞ飛行機はとどろく夏雲のなか  
いかならむ運命が待つ街路樹の暗き木蔭に佇つ占ひ師  
日を返す秋の河原の石のかげくちなは一つ舌を吐きつつ  
厨べに汝がうたふ聲ひびききて秋の日ぐれの涼しさはきぬ  
透明な悔恨があり荒草に夕日するどく亂れ、もう秋



八月歌會報

加東支社納涼吟行會 十日、西國廿五番札所播州... 濁水寺でみかしの短歌會と合同で開催。藤原優...

阪神支社例會 二十三日、今津の鮎貝久仁子宅で開く。歌會後秋季大會の準備打合せをした。西...

阪南歌會例會 二十四日、酒井青峯宅で開く。浦林繁樹、大野美代子、長原雪生等十七名出席。

北攝歌會例會 二十四日、箕面の得光鶴代宅で開く。阿部潔二、宮崎定子等十五名出席。

同人社友 同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、同人、準同人は社友の中から...

白珠社清規抄

入社 入社希望者は、氏名、年齢、職業、歌歴を明記の上、社費三ヶ月以上を添へ申込みのこと。

社費 一ヶ月社友六十円、誌友五十円。(申出により療養者及び學生は誌友並同一家族は一人を除き他は半額)

投稿 毎月、短歌一人十首以内及び文章等随意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切る。

添削 一回十首限り、添削料百円。宛名明記切手貼附の返送用封筒同封の上、申込みのこと。

尾荒雄、西村久雄等七名出席。またたきで星の呼吸する窓の下瀧湯の思ひぬはれず臥す 前田 孝

大和支社通信歌會 十四首の詠草に對し、入江春行、佐野美代子等十一名の選歌通信があり、整理の結果、最高點歌は次の一首。

安田青風 「歌集「牡丹の園」私抄」を「中外日報」(八月二十日・廿四日)に、「竹」を「草の葉」九月號に發表。

林 鶴雄 「雜龍山夕景」(繪と文)を「朝日新聞」(大阪・八月廿七日)に發表。

白珠は六周年を迎へ、通巻七十號に達した。短いといへば短い月日であるが、この間に白珠はやつとここまで來たのである。

編集後記

白珠全体のレベルが向上してくと、それが白珠の各個人に影響を興へるのである。われわれは、今後また、一首々々、一ヶ月一ヶ月努力して行かなければならぬ。

加古牧人君の三回にわたつた誠實な批評文は、本號で終つた。このやうな研究的批評文が、今後多くの方々から寄せられることを期待したい。

本號に掲げた拙稿は、夏季講座での話を、津川彌知世さんがテープレコーダーに録音して下さつたのに基

の世界」を同(八月廿一日)に、「梅干をほす子供」を「新蜀西」(八月廿六日)に發表。

木下 忠夫 (大阪) 酒井 青峯 瀧澤 勳 (岡山) 安田 青風 大西 由希子 (西宮) 大野 光枝 (兵庫) 佐藤 昌子 (宮島) 兵衛 隆 (大阪) 吉田 彌壽夫 (塩田) 福山 小方二郎 (西國) 徳島 柳澤 久俊 (豊中) 川人 吉士 (大和) 喜久 (大阪) 田中 雨花 (高橋) 千代子 (東京) 柳瀬 あや (東京) 小熊 利尚 (大阪) 本田 正夫 (森原) 光 同 (同) 同

發行維持費寄附 ▲二八口 大井秀子 ▲五口 杉山楚風 ▲四口 望月真咲

十一月歌會案内 十一月九日 大阪府立大手前高校(市電大手前下車、府廳北隣)午後二時開會、午後四時閉會。

白珠 第七卷 第十一號 定價五 十 円 昭和二十七年十月二十日印刷 昭和二十七年十一月一日發行

大阪府豊中市新免七五七 編輯 安 田 喜 一 郎 發行所 安 田 喜 一 郎 大阪府豊中市高麗橋五丁目三三五 印刷者 篠 田 錠 次 大阪府豊中市高麗橋五丁目三三五 印刷所 株式會社 萬年 社

大阪府豊中市高麗橋五丁目三三五 發行所 白 珠 社 振替大阪一〇三三九〇番

大阪府豊中市高麗橋五丁目三三五 發行所 白 珠 社 振替大阪一〇三三九〇番

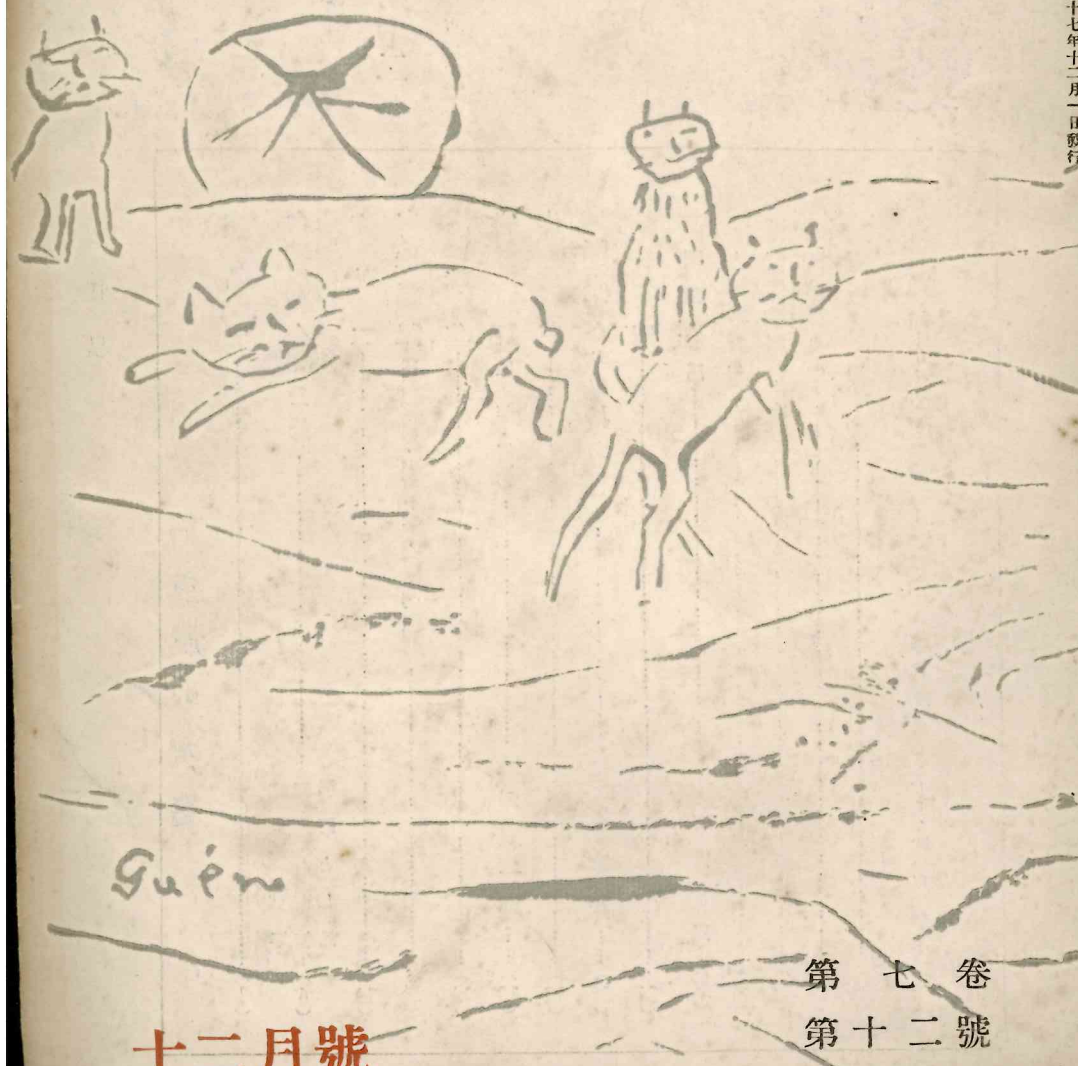
大阪府豊中市高麗橋五丁目三三五 發行所 白 珠 社 振替大阪一〇三三九〇番

大阪府豊中市高麗橋五丁目三三五 發行所 白 珠 社 振替大阪一〇三三九〇番

大阪府豊中市高麗橋五丁目三三五 發行所 白 珠 社 振替大阪一〇三三九〇番



# 白珠



十二月號

第七卷  
第十二號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十六年五月二十一日國鐵特別取扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十七年十一月二十日印刷 昭和二十七年十二月一日發行

白珠 SHIRATAMA 第七卷 第十二號 通卷 七十一號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十六年五月二十一日國鐵特別取扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十七年十一月二十日印刷 昭和二十七年十二月一日發行

白珠 SHIRATAMA 第七卷 第十二號

創元社新刊 (白珠社取次)

安田章生歌集 白珠叢書第三編

表 情 三六判 二五〇頁 極上美本  
定價 二五〇円(送料二五円)

清澄な歌境、端正な格調、抒情味豊かな底にはつねに知性が光つて、一首々に沈潜した深さがある著者の第四歌集。

若竹社新刊 (白珠社取次)

大阪大學 宇佐美喜三八著

和歌史に關する研究 A5判・三五六頁  
定價 三五〇円(送料四〇円)

和歌史に關する研究を主にして、収録せる論文十五篇。いづれも前人未考の問題を取り上げ、健實なる實證的方法により新事實を究明し、創見を樹立せるもの。敢へて好學の士の清鑑を庶幾ふ。

白珠社取次書

酒井青峯歌集 白木 價 二〇〇円(送料共)  
大井秀子歌集 しら 萩 價 二〇〇円( )  
安田章生歌論集 現代短歌ノート 價 五〇円( )  
白珠第一歌集 價 一一〇円( )

・右いづれも殘部僅少。  
・右の書以外の白珠同人の著書は品切。

白珠第七卷合本

クロス金文字入製本、送料共三五〇円。御希望の方は十二月三十日までに御申込み下さい。

白珠 バックナンバー

創刊號を除き若干あります。一冊送料共二〇円。御希望の方は、號數明記の上、御申込み下さい。



地上の女

野口トミ子

ゆたゆたと青き波たつ河の上空気はこたげたまだ新しい  
疲れては心保てず千切れたることばつながむ思ひ湧けども  
悲壯なる個々の思ひに生きてゐる路にあたふたとすれ違ふ人  
赤茶けた線路の砂利の夕かけりいらだつ胸をそつといたはる  
慰めむすべなく話ききてをり彼女も吾も地上の女

低唱

原三吉

夕さればおどろ草むら風たちて靡けばゆるるわれのこころも  
昏れゆく窓に射す陽に面むけて心素直に明日を待たむ  
憎しみておつつ吾から寄りそひてゆかねば居れぬかなしき疼き

小さな話題

鮎貝久仁子

こころと轉がりてゆくごむ穂の吾に還らずこころとゆく  
病みてゐて感傷過剰になりをれば小さな話題に涙こぼれぬ  
秋の陽のややかにかけりし縁先に氷のとけし氷裏ひとつ  
吾亦紅すすき女郎花くれし友わびしく山を歩きしといふ  
ブルジョアと人らはいへど月並の倅給生活二十幾年  
悲しさも貧しさも人に告げずして私の心はいつもブルジョア

白き塑像

高井祥平

審美論闘はしめる若きらにもたして白き塑像ならべり  
風ひえて庭に陽ざしを戀ふる日はぶどう棚より黄葉の舞ひ落つ  
秋陽光部屋に射せば白毛糸巻く手ががさず影を目守る  
わが素質下に信じて自らを恃みつつなほ生きつがむとす  
泣く聲の外よりすれば耳ささく妻は聞きゐてよその子といふ

續清水山清行

藤原優

仁王尊の阿呼の呼吸に厭されつづ衆生の二人山門をくぐる  
講堂の百疊敷に獨り坐し一山に亘る蟬時雨きく  
忠臣氏範憤死の地といふ石標あり木ごもりの道草も刈られて  
中堂の棟の端なる鬼瓦角面にして入り陽にいどむ  
播磨野に日の沈むころ一山の木々をゆるがし風は上り來

相黙し

杉野としゑ

はなやかに海にりゆく陽に遠く暗き波まを魚らは眠る  
たしかなる絆と我ら信じをりそのかけはしに似しあけくれを  
一本の細き絆により合へるその危さを恐るる日あり  
たまゆらを跳梁したる罪ふかき思惟のみにくく崩れゆく海

新秋

永瀬翠明

陽に光る青萱の波のいろ澄みて今年の秋の鮮しさなり  
ひぐらしのひたなくいのち何ものに縋らむとするか夕光の山  
唱ふ聲泣くこゑありてたそがれの村のどめきの親しきかなや  
山の緑かぎる夕べの空の色ガラスのごとし秋に入りたり  
自轉車を押す道となり耐へ耐へしいばりを放つ溝の流れに

病む子

島下八重子

鳥の聲子とたのしまむ日よあれと濃きみどり疊木立に祈る  
健やかに生命たのしみ鳴くならむ虫も羨まし病む子を持つては  
泥のごとき露に沈める瓦斯タンクかの傍らに夫も憂ひぬむ  
サルビアの花壇火と燃ゆ病める子を慮やさむ願ひ熾烈なる朝  
弱りしもの特に目にしむこの秋や金魚留紅草病み上りの子

秋の燈のうるめる下に粉薬の包紙にて今日も鶴折る

雲と風

黒田憲一郎

新しきビルの白壁移りゆくゆふ雲明りわれひとり看よ  
あかあかと燃えゆくものを西空にかくのごとくにわが夕べあり  
シユミーズが風に光りて窓にあり暗愚の憩ひ誰れ憚らず  
ひそかなる哀みをいま願たむと光閉ちゆく雲を指す手よ  
夜もすがら灯を消すことのなきビルを出で入る聲は憩らひならず  
炎手に黄花草ささぐるカンナよりわれの視線のゆくところなく

老兵吟

田中克己

全裝備三十キロを軽々と若き兵らは負ひて駈けるも  
日本の都市はおほむね焼けしとふ妻子のことも今は思はず  
悲しみも喜びもなし高梁のまじれる飯を懸命に食む  
かつて吾を打ちし伍長はこのゆふべむくろとなりて歸り來しはや  
引き鐵をおのが足もて引き死にし上等兵を思ふ日のあり  
夕まけて營庭に立ち正行の戦死の歌を兵らうたひぬ

彌陀來迎圖

安田佐和乃

九月六日、吉澤善則博士のお伴をして高野山に登る  
月讀の光るしづくにぬれて立つ大門は峽の夜空狭めて  
ゆかたがけの先生に従ふすでにしてパチンコもある高野夜の町  
繪はがきに寄せ書きをして櫻池院池の緋鯉に暫し佇む  
靈寶殿に入りて立ちつくし息長く襟正す彌陀來迎圖の前

豫期せぬに

得光鶴代

煤煙臭き街住みを今日稻の穂の豊かにみのる野の徑に來ぬ

よその家より十時をうつに促がされ熱ある身をはいたり寝むか  
慰まむ何ものもなき雨の中をバスに揺られて歸るところか  
豫期せぬにいまつき當る悲しみはわれに親しき友の上にして  
ゆくりなく霽れゆく空をまもりつつあきらめに似て心明るし  
額禿げ頬やせせけしわが顔が地下鐵の窓の硝子にうつる  
久々に心は澄みてすずかけの木ぬれを遠く秋の空見る  
争ひを好まぬ我がやうやくに忍びきたりて今日の安らぎ  
人間のもろさはかなさししみじみと思ひめぐらす夜半をめぐり  
雨あとの寺のいらかはしみじみと秋の陽射しをあびて光れり

秋光

酒井青峯

一票

深澤峽村

頼み難きもののみ多き代に生きてまた一票を投ぜねばならぬ  
戦争か平和かと云ふも單純に選舉スローガンとして宣傳す  
住む家さへ無き吾等にてかそかなる光のごとく心よせあふ  
鈴木金二が自殺はかりし思出も切なきまで今宵身にしむ  
秋の空日ごとく清く澄みゆけど心慰ます妻子おもへば

夕映え

宇佐美喜三八

人ひとりの運命きめて歸り來つともず鋭聲たてて夕映え薄らぐ  
怒濤に飛びこむ覺悟をもとと聲おこり日暮れて會議は議決を得たり  
ま夜中に吠ゆる聲々聞くところ犬の賢愚を分たむとする  
獨りゐて冷えたる疊に寝ころべば天井の隅を這へる蜂あり

夜の湖

安田章生

旅の宿の窓邊にゐたりボブラ一木風に鳴るとき湖暮れて  
かなたより風は吹きつつ夜となれば湖は呼ぶはるかなる過去



詩と歌と

田中克己

私は詩を作り出してから、かれこれ二十年以上になるが、そのまへは歌を作つてみた。そんなわけもあつて、戦後は歌を作るやうになり、最近では「白珠」の同人にしていたといふ喜んでゐる。しかし詩を作るときと、歌を作るときとは、いくらか心構へがちがふやうに思ふ。

どこが違ふか自分でもはつきりたしかめてはゐないが、少くとも詩のときは何をうたふかだけを考へればよいのに對して、歌を作るときには、そのうへにどう歌ふかを考へてゐるやうに思ふ。

何をうたふかは共通であるけれど、歌でうたひ切れないものを詩で歌つてしまふときが多く、それはいままでの習慣といふよりは、歌の三十一文字しかない小さい形式のせいのやうに思つてゐる。詩と歌とに共通した根柢——内にあるポエジー——からして歌はうとする、歌では連作の形でもとらないことには歌ひ切れないやうな、複雑な内容が、詩では簡単にすらくと言へてしまふ。

しかしこれも口語を用ひ、韻も必要とせず、行も字数も自由といふ、日本で特別に自由にしてもらった日本の「詩」なるもののおかげで、これらの

約束の一つでも、詩に存在してゐるなら歌と同じやうな苦しみにあふのであらうが、幸ひに詩人はそれを免がれてゐる。

しかしこれは私が歌壇にうといせいで、歌にも何れ拘束がないのだといふ人があらう。三十一文字などはもうみな問題にしてゐないし、日本短歌の永い傳統だつた調子もしたがつて無視してゐるのだと、云ふ人があるかと思ふ。

しかし歌を作るときは、これらの點では非常に嚴格である。これは、でなければ、歌を作るべきの私と詩人としての私との區別がつかなくなつてしまふからであらう。したがつて調子の邪魔になるやうなことは、たとへばP・T・Aとか講和條約成立とかいふやうなことも使ひたがらない。そのせいで若い人から、このまへ朝鮮をからくにと歌つたといつて叱られたが、「朝鮮」といふ語は韓國人みづからもきらつてゐる。吾々からは音の上だけでも不快な連想をとまなふのである。こんな語を平氣で三十一文字にはめこむなだこそ不可解だと、私はやり返した。しかし句調の上さだけならつて、短歌の本質からはなれてしまふのではないか、といふ詰問には、それこそ専門家らしい用意が出来てゐる。短歌の短歌たる本質は、ポエジーがあるかないかだ。ポエジーの問題なら、私は二十年以上苦勞したのである。この心構へがたつてか、私の歌はいまのところ、

主題

一知的抒情の一端について

清原令子

自己をうたひ、自己以外のものを一應歌ひつくしてしまつた場合、思想感情を短歌といふみちかい詩形式のなかに押しこめることが出来なくなつてしまつた場合等を考へて私のもつ短歌の限界をときどきに思ふ。つまり私の示す人間としての巾についてもそれは言へることなのかもしれない。文學としての生命は、つねに新しい感覚をのぞむ、といふよりむしろ新しい精神をもちつづけてゆく新しい生き方の問題にあるといふ。しかし自分の肌あひにふさはしくないものを捉へてきて、むやみに新しがるのもどうかと思ふし、やはり今まで歌ひつづけてきた主題と傳統をふまへたうへの清新さが望ましいと思ふ。要はいまの時代にどのやうに對決し、詩を通してそれぞれがどのやうに人生を培つてゆかかがいちばん大切なことになるのだから。

さういふ意味で多くの人々の作品にもいくつものものの見方、それを通して生き方へのさまざまな新しい試みが描かれてゐることに氣がついた。これは單なる一例にすぎないけれども。

破局ある愛情と思ひ時にして虚しき吾に君や  
さし過ぐ(五ノ五) 岸本 千代

蜘蛛の巣にかりたる身と言ひ放つわれ受け  
て人のなほふき笑み(六ノ六) 〃

風過ぎむ間を待つごとく人あればいどみし我  
は稚なかりしか(七ノ四) 〃

雲ひとつくづれゆきたる野にたちて風にゆれ  
るる草みつつをり(六ノ一) 吉田彌壽夫

小さきちぎ草の花にも頬よせて求めゆくわ  
れは颯くからむか(六ノ十) 〃

一むらの花もつけない草の葉がそよぐ曇り日  
上僧んではゐない(七ノ一) 〃

風の中除乾きてあらむかとのかけにのぞく  
小さき鏡(五ノ六) 岸本 千代

まみ乾きあへけるわれや吹き荒るる春の嵐に  
覆けてはならぬ(七ノ七) 〃

踏み折りし草しづしと起きあがり眼をもち  
てじろとわれを見にけり(六ノ二) 吉田彌壽夫

踏み折りし草と思ふな草の下に草よりも低へ

生きてゆくべし(七ノ四)

おなじ対象をうたつても、もの見方に形象的即物的な新しい發見があり、生き方の實感に對する革命がなされつつあるやうに、対象をあらゆる角度から照らし出して、經驗をいくたびも詩的象徴にうつし變へることによつて自己の存在をより深めてゆくことである。ここにおいて考へられるのは、ひとつの主題を通し、それを幾年かにわたつて少しづつ書き改められてゆくことも、ひいては人間性の完成に深いつながりをもつてはゐるまいかといふことである。

底知れず暗黒な面をもつ現實は、しばしば私達

薬を私は思ひ出す。

北風

山崎秀二郎

ドイツでは鶴の鳥が

赤らやんを連れて來るといふ

その、鶴の鳥が

男と女の縁の結び目を

ほどきに來た……

女の直威は男の顔に

それを見た

さまづい空氣が

部屋にたちこめて、でも

窓の外は北風が

ビュツ、ビュツ、鳴つてゐる

火鉢がほつんと

一つ

火のない歌を唄つてゐる

寒いねと、男

お茶を入れませうかと、女

男の指は火鉢の肌に

つめたい感觸を

ふと、女にしては上出来な

こんな言葉が枯葉のやうに

男の心に舞ふ……

「さうよ、私の心の

あなたが證據よ

故郷の匂ひにも似た

お茶が湯氣して運ばれた時

一ヶ月前、橋筋で

お茶を買つた記憶が

男によみがへつた……

憂鬱の冬の午後

でも、日射しは

ほんのりと明るく

ビュツ、ビュツ、北風が

鳴つてゐる……



本社例會 十三日、大手前高校で開く。出席者二十八名。例月の詠草批評のほか、席題「橋」の十分間即詠を行ひ面白かつた。ことば盡きてまひるを聞き笑とも草の吐く息にとりまかれらる(8點) 佐藤 昌子

題詠「橋」 平凡に別れ来しかばかの日よりわれの渡らぬ橋一つあり 黒田憲一郎 まつすぐに君の心に届き行く橋なしてせばその橋かけよ 安田 章生 京都支社例會 六日、佐藤美知子宅で開く。荒井俊一郎ら七名出席。 誤解せし人のまなこのうらみ想ひ街の狂女を 今日ほうらやむ 垂井 潔子 淡路支社例會 七日、洲本市専修寺で開く。社外からの参加もあり、奥恒等十四名出席。 開商にあらむ開道を荷に耐へて秋の花群嵐し て行けり 濱路 靜一 北蕨歌會例會 七日、箕面の松井正子宅で開く。 得光鶴代、田中雨花等十二名出席。 投げすてしほる布のごと厨邊にねそべる猫は 暑さにあへぐ 青森 綾子 大和支社例會 七日、泉本正濱宅で開く。入江春行、佐野美代子、佐伯重榮等五名出席。 あどけなき表情に子は寝てをり玩具の犬に 手をのせしませ 島本 正藏 世界長歌會例會 十六日、第一會議室で開く。磯村嘉千雄、朝日和子等十四名出席。

いつの日よりかかる身ぶりに親しむや口近づけてすする鏡對 浦中浩太郎 阪神支社例會 二十日、今津の船員久仁子宅で開く。久保正雄、加古牧人等二十三名出席。 光すでに秋となりたる砂濱に一人の吾と一つ の貝殻 西島 貞子 甲子園歌會例會 二十一日、甲子園口の岩田文字子宅で開く。遠見文字子等五名出席。 かくばかり稔りの波のうちつづく心ゆたけく 秋の野を行く 高木 伸子 阪南歌會例會 二十八日、帝塚山の酒井清室宅で開く。岸本千代、淺井素利子等十六名出席。 蝶二つめぐりとびをり秋ぞらの下びの生のおづからなる 津川彌知世 東京支社例會 二十八日、下高井戸の高井祥平宅で開く。小野三沙子等九名出席。 はるかなる友と別れていくとせやかまつか赤き秋に思ふかな 柳瀬 あや

社中消息

○安田青風 「白梅」十七首を「現代短歌代表選集」(九五二年版)に、「五分間の出来事」を「中外日報」(十月二日)に發表。九月二十日、大阪市文化會館友の會で「短歌の世界」を、同二十四日、尼崎市公民館市民講座で「婦人と短歌」を、同三十日、ライオハウスで「筆歌と短歌」を講演。十月十九日、BK短歌選評放送。岡、大阪電氣通信高等學校々歌を作詞。 ○安田章生 「風のなか」十二首を「短歌研究」十月號に、「新しき發想法」を、「方冊」第五

新入社友 (氏名) (住所) (紹介者) 清水サカエ 尼崎 鈴木和子 大阪 依光有義 高知 稻葉志津子 東京 石田 泰兵 兵庫 酒井青峯 村上長治 大阪 高野智子 兵庫 眞部 衛 大阪 名賀常盤 同 安井俊二 長谷川 幸枝 静岡 川居 貞行 大阪 本田正夫

發行維持費寄附 二八口 酒井青峯氏 ▲八口 本田正夫氏

白珠社清規抄

入社 入社希望者は、氏名、年齢、職業 歌歴を明記の上、社費三ヶ月以上を添へ申込みのこと。 同人社友 同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、同人、準同人は社友の中から力量充實した作家を推薦する。 誌友は、雜誌購讀のみで投稿は出来ない。(同人、準同人規定は別に定める。なほ特別社友の規定もある)

編集後記

○通勤の電車の窓から眺める野山に先頃まで秋の花が美しく咲きこぼれてゐたが、その花も散り、すすきの美しさもはや盛りを過ぎたやうだ。けふこの頃は、櫻やうろしのみみちが美しく、柿の實が日に映えて見事である。秋は日毎に深く、ことしもやがて冬——本號がお手許へ届く頃には、冬である。過ぎてしまへば、一年といふ時間など全く慌しく早いものであるが、やはりこの一年、われわれは努力もし、僅かながら進歩もしたやうに思ふ。白珠としても、順調な發展を遂げたいといへるであらう。社中の方々の御熱意、御高擧に對して、この機會に深き感謝を捧げたいと思ふ。 ○本號は、經濟的理由のため、減頁したが、次號からは舊に復したい豫定である。 ○秋季大會の記事は次號に掲げるが盛會であつた。いろいろと御世話願つた阪神支社の方々に厚く御禮申し上げた。

社費 一ヶ月社友六十円、誌友五十円。(中出により肄業者及び學生は誌友並同人家族は一人を除き他は半額) 社費切の時は直ちに送金の事。退社の時はその旨申し出る事。 送金の時は所屬欄を明記し、なるべく振替を利用のこと。

○拙歌集「表情」は、豫定よりも刊行が遅れてゐるが、本號よりやゝ遅れて出ることと思つてゐる。店頭にも若干出るが、少部數なので、白珠社宛お申し込み頂きたいと思ふ。その分には屏書きしてお送りすることとする。なほ、すでにお申し込み頂いた方々の御好意に對しては感謝のほかはなく、本欄を借りて厚く御禮申し上げる。 ○「現代短歌手帖」も、幸ひ好評を博して、大いに賣れてゐる由であるが、この方は、未購讀の方は、なるべく店頭でお買ひ願ひたいと思ふ。初心の方が疑問とされることは、たいてい本書で解決つくことと思つてゐる。 ○われわれをとりまく環境は、相變らず憂鬱なものであるが、かうした時代に詩を愛し、詩を愛することによつてながつてゐるお互であることを思ふ。惡環境の抵抗を突き抜けわれわれの精神を高め、生きる力ともなるやうな詩を詠みたいものである。一年の終りに反省し、更なる努力を期したい。(章生)

投稿 毎月、短歌一人十首以内及び文章等隨意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切。 原稿は原稿用紙に書き、初めに所屬欄名及び氏名を明記のこと。 添削 一回十首限り、添削料百円。宛名明記切手貼附の返送用封筒同封の上、申込みのこと。

○「現代短歌手帖」も、幸ひ好評を博して、大いに賣れてゐる由であるが、この方は、未購讀の方は、なるべく店頭でお買ひ願ひたいと思ふ。初心の方が疑問とされることは、たいてい本書で解決つくことと思つてゐる。 ○われわれをとりまく環境は、相變らず憂鬱なものであるが、かうした時代に詩を愛し、詩を愛することによつてながつてゐるお互であることを思ふ。惡環境の抵抗を突き抜けわれわれの精神を高め、生きる力ともなるやうな詩を詠みたいものである。一年の終りに反省し、更なる努力を期したい。(章生)

十二月歌會案内

十二月十四日 大阪府立大手前高校(市電大手前下車、府廳北隣)午後〇時半開會、午後四時閉會。歌會詠草は、近詠一首を十二月五日までに葉書に歌會詠草と明記して左記宛送附のこと。 大阪府大淀區中津本通大淀警察公會 得光鶴代

白珠 第七卷 第十二號 定價 五十円

昭和二十七年十二月二十日印刷 昭和二十七年十一月一日發行 大阪府豊中市新苑七七七 編輯兼 安田 喜一郎 發行所 白珠社 大坂市東區高麗橋五丁目三五 印刷者 篠田 鏡次 印刷所 株式會社 萬年社

大阪府豊中市局區内新苑七七七 發行所 白珠社 振替大阪一〇三三九〇番



# 白珠

一月號



第八卷 第一號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十六年五月二十一日國政特別取扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十七年十二月二十日印刷 昭和二十八年一月一日發行

白珠 SHIRATANIA 第八卷第一號 通卷七十二號

昭和二十二年五月十九日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)  
昭和二十六年五月二十一日國政特別取扱承認雜誌第一九七六號  
昭和二十七年十二月二十日印刷 昭和二十八年一月一日發行

白珠 SHIRATANIA 第八卷第一號 定價五十円

安田章生歌集

## 表情

白珠叢書 第三篇  
三六版一五〇頁新型美本  
定価二五〇円・二二五円

清澄な歌境  
端正な格調  
しかも  
豊かな抒情の底には  
鋭い知性が光つて  
一首一首に  
沈潜した深さのある  
著者の第四歌集

創元社・新刊  
白珠社・取次

## 賀春

昭和廿八年雜且



今年もつよく、かるく、はきよい

セカイチヨ一運動靴を

## 世界長ゴム株式会社

本社 大阪市大淀區豊崎西通二ノ七

電話豊崎(37) 代表  
三 七 七 七 七 七 七  
一 五 六 三 三 三 三 三 三  
〇 九 〇 九 八 七 六  
山 番 番 番 番 番 番 番

工場 大阪・西宮・京都・徳山

定價五十円



一片のチョコレートにも胸焼くる身にて心に燃ゆるものなし  
お母様よくいらつしやいましたお邪魔します大会に笑まし歌人の親子

高野山

黒田憲一郎

傳説の魚の話も交へつつ無明の橋を過ぐる一團  
眉白く歩みくる僧の瞳にむきてぶつかるとかくわれは近づく  
奥の院中の橋にて逢見たる女郎蜘蛛に似し黄服の美女  
苔むせる墓石に興味なき歴史茲にひとり練返すのみ  
霧沈む谷々深き息のなかに颯りくるひとつ蟬ごゑ  
高杉の樹間華やぐ夏日光しる額に髪みだし来る  
雲深く日の没るまへの無風帯一本の杉いま伐り倒されゆく  
みすぼらしき衆愚とならば安らがむ佛の山にこころなく居る

初冬

田中克己

わがひとの頬の衰へそのままに冬来りしが一のかなしみ  
道の邊のかはらよもぎに風吹きてなれが叛かん時たちけり  
象のゐる山見しわが眼はなれゆくなれが姿を見つめつつをり

赤膚山所見

十一月九日

安田佐和乃

紅き實の一つのこれる柿の木を玄關に入らむとしつつみかへる  
泥撫でて双手につくるろくろの前一時たちてまなこを凝らす  
回轉するろくろの上のこね土の双手くぐりて出で来る徳利  
ひねもすを泥をいぢりてこの翁その童顔は光りこぼるる  
歎聲をもらす友らのしりへより陶の古塔に我も見入りぬ  
泥の匂ひこもれる部屋に森閑とさまさまの形なして並べり  
一塊の泥廻り澄み見るみるに形となりてわが眼をうばふ  
幾星霜泥にしたしみ住みつきし山の傾斜にならぶ燒籠

鈴懸

得光鶴代

弾かれしごとくいで来しうつそみもネオンの下を疲れて戻る  
たのしみで轉る聲かしらねども雀らが今朝も窓のべに來て  
雀らのさへづる言葉わからねど甘き甘き聲すその中の一羽  
木枯れ呼ぶ午後となりかけらば白き羽毛をさか立て走る  
曼珠沙華炎と狂ふ下にすむくちなはの瞳の光るを見たり  
おだやかに君はあれどもわれ獨り怒りて風にさからひ歩む  
心のうつろを占めてにぐる音たえず鈴懸の實が風に鳴る

街頭録音

深沢峽村

ひと鉢の万年青を枕邊におきて今年の冬もをほらむとする  
屈したる心ひらかむこともなく雪はふり積む春の野山に  
行政協定調印のラジオひびきくるかすかにきざす不安の如く  
街録に中学生の言きげば清しきよ世に汚れざるもの  
中学生が大人にのぞむ言葉にて即いきびしき批判をふくむ  
世にむける厳しき瞳にて明日の日の君等が世界われは信ぜむ  
この兒等もやがて垢つきゆくらむかきよき響の聲を今もつ

孤影

宇佐美喜三八

孤影悄然と山の草分け登り行くわれを見知れる人多からず  
才のなき者の如くに扱はれ易きにつきて楽しく生きむか

限り知られず

安田章生

眼をあげて梢はるかに空を見る限り知られず飛び去りしもの  
梢より最後の葉落ちしときおるおるとわれは立ら上りたり  
きみいひし言葉いくつかきらめきて沈みをり今もわが胸底に

苦悶し前進する短歌

——白珠一九五二年度の作品を例に——



安田章生

わが行手暗くさへぎり打ちゆすり貨車はタン  
クを積みて行き過ぐ  
松上 茂  
單純に獨立萬歳と叫ぶご多胸底に澤のごとく  
よどめり  
深澤 峽村  
殺氣だちし論争の果てにさびしめり暗き時代  
を同じく生きて  
田中 義郎  
押しひしがれし個のうめきなど何ならむ季節  
正しく秋の風吹く  
三宅登美子  
一人子の遺骨が三つも開つたと日課のごとく  
つぶやく老母  
大村加代子  
興亡の歴史の瀬戸に生れあひわれは餘命に自  
蔑許さず  
野口 耕平

崩れたる土壁に兵は足折りて赤にごる月に日  
本娘と  
米兵に腕抱かれてゐる娘冷たき表情をわれは  
憎めず  
天保喜代子

例歌はなほ多くをあげることができが、たと  
へば右にあげたやうな作品には、こんにちの暗い  
時代と、その暗い時代に否應なしに置かれてゐる  
自らの運命とがうたはれてゐる。敗戦の傷痕は漸  
やく深く鋭くわれわれの精神にかけを落しつつか  
るといふべきであらう。

しづれかの立場を取れば安からん押しだまり  
つつ何に逆ふ  
廣畑 忠明

保守反動、武力革命を憎むとき寄邊はあらず  
大衆の意志  
藤尾 唯一

信すべき神を持たねば暗闇にけものごとく  
傷を舐めぬて  
前田 孝

眞實に觸れ得ぬゆゑに涙ぐむさびしさも今の  
世にして知れり  
濱口 忍翁

おほかたの言葉は信じ難ければ貧しき沈黙を  
今日もまもれる  
佐藤 昌子

ここには、信するものを失つて時代の不安にさ  
らされてゐる心がうたはれてゐるのであるが、現  
代ではとくに、不信が自我への誠實さと通じる場  
合があることも、注意されねばなるまい。



頌春

昭和二十八年元旦

白珠社同人

- 阿部 漂 二 豊中市千歳通二丁目二
- 鮎 貞 久 仁 子 西宮市津門吳羽町三六
- 飯 森 米 藏 新潟縣長岡市新潟大學長岡分校内
- 井 藤 勝 太郎 大阪市東淀川區堀上通一丁目二一
- 宇 佐 美 喜 三八 大阪府箕面局區内百樂莊一丁目三六
- 大 井 秀 子 兵庫縣宍粟郡山崎町西鹿澤
- 奥 野 一 松 吉 豊中市麻田二番町一二七四
- 奥 恒 兵庫縣洲本市上内膳
- 小 野 三 沙 子 東京都世田谷區玉川用賀町 櫻友寮
- 小 野 ゆ 子 神戶市東灘區本山町北畑四〇
- 加 古 牧 人 大阪市東淀川區木川西之町三丁目七〇

- 梶 紫 峯 守口市土居七八
- 門 田 俊 一 郎 大阪府富寺公園町一ノ二七
- 川 人 吉 士 徳島市矢三町
- 岸 本 千 代 大阪市阿倍野區北畠東二ノ一五
- 清 原 令 子 大阪府南河内郡黒山町黒山
- 久 保 正 雄 伊丹市平林町五ノ三五 杉田方
- 黒 田 憲 一 郎 大阪市西成區岸松通三ノ九
- 小 畑 光 城 兵庫縣宍粟郡神戶村安積
- 小 堀 保 三 郎 大阪市城東區今福大橋東詰
- 酒 井 青 峯 大阪市住吉區帝塚山西四丁目一三
- 佐 藤 昌 子 豊中市伊勢町一六ノ二
- 執 行 作 彌 大阪市北區絹笠町堂ビル二階
- 島 下 八 重 子 大阪市西區九條通二丁目四五
- 杉 野 と し 彥 大阪市阿倍野區阪南町東一ノ三四
- 鈴 木 光 秋 神奈川縣川崎市久本 東京麻糸川崎工場
- 田 中 雨 花 豊中市熊野田北町
- 田 中 克 己 布施市西堤町六〇七
- 田 中 信 子 大阪市都島區高倉町二ノ一〇四〇

- 高 井 祥 平 東京都杉並區下高井戸四ノ一〇四六
- 竹 木 田 愛 子 吹田市川面町八四二
- 谷 川 新 之 輔 大阪市北區中之島 朝日新聞大阪本社出版局
- 辻 本 和 子 奈良市佐保川町
- 徳 永 半 二 福岡縣八幡市景勝園
- 得 光 鶴 代 大阪市大淀區中津本通 大淀警察署長公舎
- 永 瀬 翠 明 島根縣簸上郡輝原村
- 中 井 壽 津 子 大阪市城東區野江西之町三ノ五四
- 長 井 登 美 子 徳山市大字下上
- 中 田 昌 二 仙台市北三番町一六 榊田方
- 中 西 明 島根縣海潮局區内須賀
- 中 村 秀 哉 大阪府中河内郡唐津町鴻池府警住宅六五號
- 中 山 千 種 神戶市東灘區住吉町坊ヶ塚四六八
- 西 尾 朱 由 豊中市月若町七六
- 西 島 貞 子 西宮市川東町四七
- 野 口 ト ミ 子 豊中市服部二〇四
- 畑 山 軍 治 兵庫縣龍野市揖西町小畑三三八
- 濱 口 忍 翁 伊丹市昆陽佐藤前六 佐藤治郎吉方

- 林 慶 太 郎 大阪府箕面局區内平尾六六六
- 林 鶴 雄 兵庫縣龍野市龍野町雷城
- 原 三 吉 堺市三國丘療養所新館八號
- 久 喜 代 東京都杉並區高円寺五ノ八〇三 紫雲莊
- 深 澤 峽 村 岩手縣宮古市地方病院二ノ三五
- 藤 澤 昭 子 大阪市住吉區墨江中一丁目四五 石濱方
- 藤 原 優 兵 兵庫縣加東郡中東條村新定
- 松 岡 秀 夫 兵庫縣赤穂郡有年村
- 前 田 孝 姫路市網干區高田三一五
- 安 井 俊 二 兵庫縣宍粟郡山崎町門前
- 安 田 章 生 奈良市法蓮北町一三二四
- 安 田 佐 和 乃 豊中市新免七五七
- 安 田 青 風 同
- 八 木 毅 布施市中小阪四八〇
- 山 本 信 實 東京都杉並區和泉町三一八
- 吉 井 薫 神戶市東灘區御影町濱中三八一
- 吉 崎 郁 大阪市阿倍野區松崎町一ノ二八
- 吉 田 彌 壽 夫 奈良市法蓮町一ノ二三九



白珠社清規抄

編集後記

入社希望者は、氏名、年齢、職業歌歴を明記の上、社費五ヶ月以上を添へ申込みのこと。  
同人社友

●同人、準同人、社友、誌友を以て組織し、同人準同人は社友の中から力量充實した作家を推薦する。誌友は、雜誌購讀のみで投稿は出来ない。(同人、準同人規定は別に定める。なほ特別社友の規定もある)

○謹んで新春のおよろこびを申し上げると共に、いよいよの御健康、御精進をもお祈り申し上げる。白珠も、本年度は更に大飛躍を遂げたくこの点についてもまたどうか一層の御盡力を賜はるやうお願ひ申し上げます。

●一ヶ月社友六十円、誌友五十円。(申出により療養者、學生は誌友並、同一家族は一入を除き他は半額)  
●社費切の時は直ちに送金の事。返社の際はその旨申し出る事。  
●送金の時は所屬欄名を明記し、なるべく振替を利用のこと。

○定例の推薦を、別に掲げた通り、本誌でおこなった。新同人の四氏はそれぞれに長い間精進もされ、近來意欲的な新風を見せつつある方々である。今後一層御活躍下さることを期待したい。加古牧人さんは醫師、竹木田愛子さんは家庭にあられ、中井壽津子さんは世界長ゴム株式會社にお勤め、前田孝さんは家業に御従事の方である。御紹介申し上げます。又、従來同様、作品四の方で一回でも白珠集に推薦となつた方は作品三へ推薦した。他は、そのひとの力柄や精進ぶりを考へて推薦したものである。

●毎月、短歌十首以内及び文章等隨意投稿のこと。但し毎月五日を以て翌々月號の分を締切る。  
●原稿は原稿用紙に書き、初めに所屬欄名及び氏名を明記のこと。  
●一回十首限り、添削料百円。宛名明記切手貼附の返送用封筒同封の上、申込みのこと。

○藝術のことは、單なる努力だけではどうにもなるものではないけれど、やはり努力しなければ又、どうにもなるものではない。藝術作品が、機械を作るやうにできないことは論をまたないし、一首もできない月もあるであらうが、努めて作り、たとへ一首でも毎月投稿するといふやうにことは皆してはどうであらう。それがどうしても取れる歌でなく没となつて載らなくても、かういふ眞摯な努力はやがて實をむすぶと思ふ。僕は念々に詩精神を磨くと共に、月々の投稿、發表を通して表現力を養つてゐるわけである。表現力といふものは、やはり一朝一夕ではつき難いものである。

○消息欄に報告した通り、藤原慶、松岡秀夫の二氏が兵庫縣文化賞を受けられた。社中の方々と共に喜び申し上げます。  
○拙歌集「表情」は、予定より一ヶ月も遅れ、早くに申し込んで下さつた方々から少なからず催促のハガキを貰いたりした。まことに恐縮な次第でその點深くお詫ひ申し上げます。しかし、やつと出来上り、お申し込

白珠 第八卷 第一號  
定價 五十円

昭和二十七年十二月二十日印刷  
昭和二十八年一月一日發行

大阪府豊中市新免七五七  
編輯兼 安田 喜一郎  
發行所 安田 喜一郎  
大阪市東區高麗橋五丁目三五  
印刷所 株式會社 萬年社

大阪府豊中市局區内新免七五七  
發行所 白珠社  
振替大阪一〇三三九〇番

白珠支社・部会

昭和二十八年一月現在

東京都杉並區下高井戸四ノ一〇四六・高井非平方	東京支社
徳島市矢三町・川人吉士方	徳島支社
大阪府住吉區帝塚山西四丁目一三・酒井青峯方	阪南歌会
大阪府箕面町櫻通・野村美美方	北摂歌会
兵庫縣加東郡中東條公民館・藤原 燭氣付	加東支社
西宮市津門吳羽町三九・鮎貝久仁子方	阪神支社
島根縣鏡川郡碑原村・永瀨察明方	島根支社
同 大原郡海潮村・中西 明方	島根海潮歌会
同 出雲郵便局・山本善二氣付	鳥根出雲歌会
京都市左京區北白川追分町・林 彌生方	京都支社
大阪市大淀區豊崎西通・世界長ゴム文化部	世界長歌会
奈良縣大和高田市大中雨町・島本正齋方	大和支社
兵庫縣揖保郡太子町福地・首藤 忠方	太子支社
同 有馬郡唐野村役場・曾谷雅行氣付	広野支社
同 突栗郡山崎町前・安井俊二方	山崎支社
大阪市東區府立大手前高樓・濱口忍翁氣付	東大阪歌会
高知市朝倉高知大學官舎・岡本多津子方	高知支社
兵庫縣洲本市上内膳・奥 恒方	淡路支社
西宮市甲子園口二丁目三二九・逸見文子方	甲子園歌会
大阪市東淀川區三國町・大阪染工三國工場内	大阪染工歌会
大阪府豊中郵便局・廣畑忠明氣付	きつつき歌会

新年懇親歌会

附「表情」出版祝賀會

恒例の新年懇親歌会を、今回は、全社中の「表情」出版への祝賀の意をこめて、なごやかに行ひたいと存じます。本廣告を以て、御案内に代へますから、是非御出席下さいませやうお願ひ申し上げます。

- 日時 一月十一日(日曜日)午前十時から
- 会場 大阪府立大手前高等學校
- 会費 五十円(懇親晚餐會出席者は別に百五十円)
- 会次第 1、歌會(午前中)  
2、出版記念會  
3、懇親晚餐會(有志)

詠草 勸題「船出一首を一月五日までに、大阪府住吉區帝塚山四丁目二三酒井青峯宛送附のこと。

備考 晝食は御持参下さい。なほ、準備の都合上、懇親晚餐會出席者は、詠草送附と同時に、その旨おしらせ下さい。

發起人 酒井 青峰 濱口 忍翁 岸本 千代  
得光 鶴代 吉田 彌壽夫 藤澤 昭子  
吉井 薫 鮎貝 久仁子 黒田 憲一郎